

自娛老錄

昭和七年一月起筆

特別  
14  
1919  
437





176702

白媛巻録一

昭和七年一月起一筆

客年の雜記、白媛巻録七冊をまとむ。本年の雜  
 録を「白媛巻録」と題書す。右端の三の歳  
 を重ぬ。此年の雜記は此の左がみさきといふ  
 思ふ。保しせん未だ巻七す。録する高し流覽  
 せんことを期すといふ。

一月七日

○年の明けを先角満月の吉が舞ふか、錦抄七  
 流まりにから、らんから始末と福のあはれが張島支  
 那をどう安分すべしとあはれうか、真いせん今始めて  
 の洞窟に多い。支那の安分問題に多い洞窟の舞臺



〔種方箋、國語館蔵書本〕







田収入六千或万萬圓の内、軍費の爲めの支出が六千  
萬圓近くあると云ふ、乃ちまんが彼等<sup>の</sup>軍備に對  
抗する爲めの費用と云ふのである。國民こそ迷惑を  
極彼等<sup>の</sup>野心の爲めは重税を拂つてゐるのである。實  
の支支那<sup>の</sup>國家を維持<sup>し</sup>爲<sup>す</sup>の爲め何れも是れ<sup>の</sup>日本  
軍備、あんなに大回<sup>つ</sup>て軍艦も海軍も、  
あんなに大回<sup>つ</sup>て列國から侵さんでも、無難を尙  
且してゐるかと思ふと、今日本のお蔭である。こゝに  
就て前年大隈侯の語んたことを追憶する。其侯  
曰く支那將來の國防は日本が引受けなすべし。現  
在と云ふ事、實上支那の國防は日本が引受けしてゐる  
のである。即ち今日支那の海軍も日本が引受けしてゐる。

標本製

海岸線と海軍支那の海軍が在りてあるから、第一此  
れは支那の獨立國の資格がある。従つて世界の列國が  
支那に侵入せんとなんば、どこからか勝手次第で侵  
入し得るのである。然るに列國が敢て支那に手出しをせぬ  
のは、日本の優越も抑へてゐるからである。又將來と云  
ふ支那の獨力を海軍と建設し得やうと思ふのである。こゝに  
不言の詞は日本が支那の國防を引受けをゐる。何れも  
證據がある。又支那の陸境關係を一掃するんば、こゝに  
海上と異なり、霞もいふに直接支那に侵入し得る  
國の多い。こゝに日本が在る以上、霞もが支那を侵  
入するに出來ぬ。此れは、こゝに實上現に日本の支那  
の國防を引受けしてゐるからである。と洵に大隈侯の



言ふに通りである。支那は、歐洲が絶えずあつたが、支那は軍  
閥同士の内争がある。若し軍閥を全然剷絶し、以て、支  
那の内乱もさうさう、其の内部に殺戮も全然停まらざる  
あらう。假し大隈の言の如く日本が代つて、支那の  
國防を擔當するところ、以て、支那は、**○軍閥を**  
とぬ。現在に於て、支那は日本の力に依つて國防を  
且してゐるのである。支那が、**○支那の**  
一向に開港する所の、**○支那の**、**○支那の**  
からである。**○何れも、****○支那の**  
ハ重欲を事としてゐるが、皆私腹を肥す為の  
供して、其も四利民福を顧みない。軍閥を倒して私  
閥を費す資金を、**○支那の**、**○支那の**



富ありねば、**○支那の**、**○支那の**  
軍閥を剷絶する。日本は、**○支那の**  
々々措き、**○支那の**、**○支那の**  
他の諸藩が互ひに割據して互ひに権力を争ひ、  
此れ、**○支那の**、**○支那の**  
此れ、**○支那の**、**○支那の**  
得るもの、**○支那の**、**○支那の**  
務と、**○支那の**、**○支那の**  
了り、**○支那の**、**○支那の**  
返して、**○支那の**、**○支那の**  
支那は、**○支那の**、**○支那の**  
耶の、**○支那の**、**○支那の**











今のところ軍閥が跳梁してゐて、産業革命に向ける資金が乏しい、儲け得る資金は悉く回利民福に専らせざる興へる軍閥維持に消費されて、財政は窮乏を来してゐる。さうしていつか日本は恐慌する時、日貨に値上げを起す。日貨我通高上の障礙を除かざれば、東洋の諸國は決して軍閥を擁護し、日支の親善の關係は断絶する。軍閥が存する限り、支那の進歩は見込がらぬ。

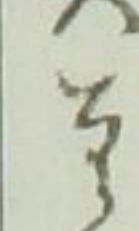
三月の満蒙事變もや、局を破らんとして、こゝから外交談判に移るの必要があるが、日本の以てんを要求と提議するは、英米佛の志きりる氣を揉みかゝるゝい。日本の此の事變は、拂つた犠牲

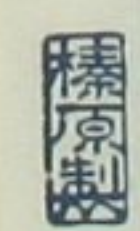
支那の犠牲

ハ清と云ふは、日本の取らざる所、飽くまで支那の好意と支那の要求を要するに相違ない。是が支那の欲するところであつても、是は窮乏支那の爲めであることかある。乃ち満蒙の權益を犯さぬこと、ポイユツトをぬくこと、軍閥を廢すこと、皆日本に利益があること、支那の利益とあること、支那が早急日清の要請がある、相違ない。支那のこのとき、亂脈の圓は、利益外力を以つて、覚醒を促す



より外に無い。日本の要求が支那の内訌に五日入るは  
七、尚くも誠意を以つて善道する友誼の主脚す  
の以上、何人の憚り所かあろうか、列強支那の教  
へ存心するぬ回れ、それより教へべき位地である  
道、四の日本の外に無いのである。

列強支那の幾年間の間、日本の厄介な事々、然る改其の  
又、この主眼点。則ち治安を維持するも、七軍閥の  
頼り、さうさう、宣う治安を定むる、軍閥を  
廢する他、なれぬ、治安を保つとも、支那  
の敬を、治安の、其の、軍閥は格別、速つたよ  
むらう、列強は頼すへきである。日本の如き、物練  
る、正直の敬を、、あつて、これを、



治安が保たれる、この、マカ、全、  
を、日本、  
け、日本、  
一、  
軍、  
分、  
深、  
若、  
開、  
失、  
乱、  
と、



るいから、財政を救ふ理すまゝに到底支那人自身か  
ハ出来ずある。支那をや、見るべき状態を救ふに  
此状態は外國が擔當してゐるものである。従つて日本  
は信賴しなすべく、十年後日本の厄介するところ  
利産の増があくまゝ。日本の厄介する法向いんまこと  
まゝやつてやらねばならぬ。支那が日本の感謝する日  
ハ、早晩あること勿論である。  
一月七日記

○此の冊子の扉：張つた時代の衣、恐らく慶長  
頃のものと想ふ。質樸な、風味があつておかし  
ろい。多く刻を寄を集めて、澤山もや文様や縫や  
鹿の子を、研究して人の説に依ると、こんな歴史  
史を修するもの無いと云ふのである。世の中は如何に風俗



関するやうな出来ごとがあつたとすると、そんなやうな  
衣巻の上は反映する。例へば都令々大寺火災があ  
つたとすると、そこで変化が起ると生ずる。例へば元禄火災  
りの衣巻は善美を極めたもの且つ物と表し、比喩  
であるが、元禄の大火があつた後、如何かと云ふと、文様  
ハ著しく大きくなり、縫や鹿子紋や鹿子  
手が多く着せられた。さうして多くの需用を産し  
て、好む所から、細い文様を大きくして問合  
ハせる。鹿の子も正式に縫つておける手問合  
ら、型は鹿子鹿子の子らしく見え、やうな問  
合のせいで、来る、何曆の大火のあとと云ふ  
必しも同じやうなことがある。相違ない。俟約



金の出たあつとさむい、別して示あむ、大なる変化があ  
つたが、其の金の出る前と較べると、截然とちか  
異があること、寛政前後のころを、兼て見  
ると直ぐわかる。こんなことも、先づ、金力の問題  
に、金力のあつた所と、いふことがある。同じ京都を  
するとも、七、禁度の御料と、御用と、甲  
乙がある、前者が、あつて、いふ、子法、力の大、小、よ  
りの、ある。友、親、の、京都、の、この、いふ、さう、さう、  
日、友、親、の方が、精巧、ひ、あつた、の、七、文、法、の、加、増、の、力、が  
さう、さう、さう、の、いふ、あつた、時代、や、事件、の、日、友、映、の、争、ひ、難、い  
この、い、列、表、の、やう、な、徴、拍、ひ、も、あつた、と、其、の、変、化、を、示、す  
こと、以上、の、例、も、さう、さう、い、つ、お、や、支、那、の、刊、行、圖、を、年



邦、明、と、洋、山、と、海、列、し、て、見、る、こ、と、が、あ、る、が、版、式、の、精、粗、の、  
回、の、差、別、さう、さう、あ、つた、こ、と、も、出、来、ま、う、の、段、階、が、見、え、ら、れ、朝  
鮮、の、文、化、も、い、い、文、禄、の、役、が、根、こ、を、き、破、産、と、い、ふ、の、  
に、其、後、の、刊、行、圖、の、版、式、が、勇、猛、さう、さう、に、こ、も、海  
列、の、著、し、い、感、が、こ、こ、に、あ、つた、。文、書、も、さう、さう、の、時代、  
に、依、つ、て、將、に、権、力、の、増、長、に、依、つ、て、著、し、い、事、が、あ、る、就  
同、時、代、に、相、定、の、論、者、も、容、易、に、倚、靠、と、い、ふ、の、影、子、の、  
御、論、者、も、さう、あ、つた、こ、と、も、著、し、い、勅、令、を、認、め、さ、ん、を、起、去、に、隠  
て、稱、心、倚、靠、が、出、来、な、つた、の、ち、に、さ、ん、さ、ん、と、勅、令、を、見、ん  
ハ、互、に、著、し、い、時、代、の、こ、と、も、さう、さう、の、勢、の、よ、い、武、將、の、清  
忠、と、著、し、い、武、將、の、清、忠、と、較、べ、て、見、つ、と、さう、著、し、い、版、式、や、紙  
質、や、紙、の、大、小、や、筆、墨、の、差、別、も、知、ん、る、こ、と、も、あ、る、。



○昨夜夢に竹林を遊んじたり。或る夢を見れば。世に竹亦七  
 賢と云ふ事あり。あつたわらわを羨んじたり。譯に云ふ事、こん  
 る夢を見れば。いふ言が竹に取味をありしをみる分らむ。あ  
 らう。竹は松と同じや。東洋特有のものである。日本  
 は暖る竹に乏しくある。北海道も七朝鮮の北も  
 多し。必竟寒地より育れぬと見入る。多し他日もの  
 地もいふこともある。勿論甚だ多し。成るに足る。外回  
 りに珍しくしかつて。小くも竹一本を鉢植 盆裁とも  
 玩んむ。あるが。日本に未だ竹林を利する事を見れば。定  
 めて敬むべきの目を睨むにあらう。日本に竹の多し。こ  
 と人の姓に竹し字の添つてゐるの多し。いふに七むん  
 であらう。今出づる書き列記を又て七二十五位に



竹村、竹中、竹内、竹田、竹橋、竹山、竹原、竹谷、竹野、竹林、  
 竹下、竹崎、竹島、竹園、竹洋、竹川、竹井、竹延、竹本、竹下、  
 竹尾、竹崎、竹井、竹河、竹大竹、竹野、竹田、竹中、竹内、竹村、竹考、  
 いくらもあつた。あつた。日本に松の園とあつたと共に竹の  
 園ともよく得るであらう。

日本に若し松か無つたら。日本の景も美し。半減する。た  
 らし。竹の園とあつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。  
 矢張り。風は美か。少くも減する。あつた。あつた。あつた。あつた。  
 七節。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。  
 今亦。竹林のあつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。  
 七。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。  
 塙根の代りにしてあつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。



つて美やましく感ずる。竹林を透し中を見んば多くは  
衰へる。食米の茅屋が、此の林に包まんとあるが、確かに  
こゝの家<sup>農</sup>の跡<sup>跡</sup>もある。大きな家ありと何れも、此の  
大竹林がある。遠くから見ると別して風致がある。  
免れずと、村道のお側々竹林があつて、梢頭が双  
方から垂れさか<sup>日</sup>り、白雪と清晴い意があるが、何  
とろろ人衆を離れて仙境に往つて換る氣かして、  
低細きり難い感がある。雪中入ると、雪が梢頭を壓  
して、毎双方からひとく垂れ下るの、宛からトニ子れを  
現出する。雪が危げれば、竹の姿もよいとある。ち  
い糸の上の白雪も一種の故がある。時々重みの為め  
かちくと雪が落ちる。雪も一種の味がある。夜中枕頭を

少くも七味のあつたもの。河邊の竹林も河を渡つた  
で、まが茂りもある。長堤より、踏んば枝がシタレた  
映する。風景の何んとも云へぬ。竹もいろいろ種類があ  
つて、葉の細から、竹の葉生してある所、南畫の風致  
を感ずる。こゝを、熱海の折つて、山に竹と云ふ。此の  
趣がある。一例がある。家庭の庭にも、風致の異なる竹を  
栽くことが出来た。あるを隠す。此の竹の白の  
風致を為すから、一歩お得がある。小さな庭にも、竹を  
を入ることが出来た。其の竹のこと、犬の延びる  
いやむさういもの、どうあつても要つ。書家がよ  
よあす、やうに、石の竹が附き、よんか無ん、石の  
趣が、ハートセント、減殺する。寺社の境内に、抵成











卯酉の言中、**卯**すやも飛凍の比路よとまふら  
 非を二つ又割つて、その二片を鼻端を杜おしとま  
 を言中してすやも習儀があつた。又、時々の村を  
 の為すや、御つて笛をいと他つたこともあつた。志の  
 一こんることもさふ、賽の神を祀つこともあつた。  
 こんの雪中の年中行するの、雪を積み上げて其  
 をゆる其上に多くの非を心して種々の焚材をか  
 らみ上を葉を掩めて**取焚**くといふが、竹のせけ  
 る時に**爆**がすすまう、如くも**北**味を元  
 (比、いふと、**取**と**爆**の非がある)

漢京製

料を供するのが常であつた。自分の幼年の頃、毎月廿五  
 日の**菅**神を祭る習儀があつた。寺小屋の西側、古が天神海  
 を復儀して、**吹**常々、**籠**りの家、**扱**き、**八**らとを共々するが  
 恒例であつた。菅の葉は、**籠**り、**扱**き、**八**ら、**七**大さ  
 有、**籠**り、**扱**きの玉子と、**籠**り、**扱**きのま、**八**ら、**七**大さ  
 である。じんたやと、**籠**り、**扱**きの細い菅、**扱**き、**八**ら、**七**大さ  
 い、**扱**きが、**籠**り、**扱**きを仕つた。ま、**八**ら、**七**大さ、**籠**り、**扱**き  
 思、**八**ら、**七**大さ、**籠**り、**扱**きを仕つた。ま、**八**ら、**七**大さ、**籠**り、**扱**き  
 して、**籠**り、**扱**きを仕つた。ま、**八**ら、**七**大さ、**籠**り、**扱**き  
 比、上方のよ、**籠**り、**扱**きを仕つた。ま、**八**ら、**七**大さ、**籠**り、**扱**き  
 連、**籠**り、**扱**きを仕つた。ま、**八**ら、**七**大さ、**籠**り、**扱**き  
 の行、**籠**り、**扱**きを仕つた。ま、**八**ら、**七**大さ、**籠**り、**扱**き











又今の八道歌は江表を拂ひ去りの七あるが一月十日記  
〇保し信河の古蹟を病めと守本二冊を得たり。曰く思善を  
黙稿稿を志略共は六府小宮山伯菟の手稿を一冊  
思善を黙稿稿の待を保し志略は経歴を叙し附す  
るに伯菟を以てす。伯菟古梁と稱し小宮楓軒の  
孫也。嘗つて六府の郡守宰は六府府に甲申郡守  
初の起るに迄んて有邊互に排擯し伯菟七毒池の  
獄に繋かること五年の長きる及ぶ。此の二冊皆不  
獄中の心也。唯九獄中、紙著るべきを以て出獄の  
後追記する所とす。伯菟を思善を黙稿稿と四名  
し詩集に思善を黙稿稿と四名し。此故也。卷首に  
神徳海遠山高年の序を収む。神伯菟と獄を

標原製

思善の序も也。伯菟の下獄戊辰十一月海にあり。こと擬  
絶命詞の題に在り。數る七短し。詞皆風下を揮又  
一讀情愴を感ふ。稿中志略の獄中記以の  
と記し六獄の内容を詳かす。伯菟獄中曰志  
善く詩を録す。性々興味を感ふ。記す。あり。左  
一二を抄す

霸府藩弟、稱上野人者、多不令終、本多正純、堀田  
正信、喜良義、共、並稱上野人、皆不令終、近時小栗  
又市、亦稱上野人、元戊辰之難、呈事、異三人、志其  
誰、令終一也

仙臺中野、徳宗時、奸臣石田甲斐、否、以陰謀、篡奪  
事、亦多、甲斐、伏誅、徳宗、恐得、罪、於、宗、氣、負、密、地



吾義公庶公子為嗣、以信其四、此為中將國村、始  
得免社稷、細村及奉一子、自謂云、月之為嗣、長德  
伊達氏、誤、非吾志矣、一日抱之、步中庭、為誤墮、公上  
殺之、以故、與子、世、復、悖、伊達氏、是、說、仙、生、權  
田、良、佑、所、傳、而、本、滿、德、所、不、可、也、姑、錄、于、此、以  
質、異、也、勉、有、人、說

長三

烈公常多內寵、侍臣菊池元微諷之、公曰、孤實欲  
身、子、以、為、孫、孫、子、庶、或、存、東、照、堂、公、子、孫、於  
百世、孤、志、在、茲、也、母、復、言、焉、元微說

勉有夫人曰、常親常為先生像、十指不前、爪、蓋、亡、回  
造、臣、為、日、主、服、心、喪、者、之、禮、也

海邊華山、答金子武四、有云、君子東札中、叙寒

標原製

暄、詞、起、岳、者、動、累、教、十、言、而、傳、要、語、報、異、少、者、僅  
々、不、思、數、行、詞、順、之、休、不、宜、如、此、又、云、貴、為、士、如、某  
聞、名、已、久、意、未、安、在、者、亦、多、吾、子、得、交、其、如、惡  
相、近、者、固、可、交、而、如、惡、不、相、近、者、亦、不可、不、交、金  
子、當、師、事、華、山、者、故、其、言、切、直、如、此、余、夜、親、其  
書、如、解、先生、法

志、略、中、亦、記、獄、內、之、事、と、記、す、許、う、也、當、時、獄、金、の、甚、穢  
不、潔、人、を、一、と、殺、而、不、せ、一、と、し、る、もの、有、り、入、獄、者、の、多、く、死、す、る、性  
あ、ら、ず、と、し、る、文、字、あ、る、もの、下、獄、者、稀、ん、と、し、る、故、に、其、の  
状、を、記、す、る、もの、有、り、伯、龜、の、記、卷、房、に、抄、り、し、る、もの、少、か  
ら、か、余、も、固、固、と、知、り、清、ん、と、日、感、し、傷、く、さ、る、もの、集、り  
比、多、し

一月十日記



○予孫書と英集する癖あるも書ふのみを切つて其内家  
を以ててその書ふべきにいらざる中の固く少くも其  
世の所謂の軟派たる名を以て孫書なる名を以てし  
し、今たゞ其の意を以てて書つて見ざる中の内、初めの内容  
を以て得ざるあり、二三を掲ぐ

凡人北村季吟の編輯は係る中の内「岩ついで」とも  
くこの中あり、衆道歌集なる。此書は正徳三年  
東都の書肆津田玄左衛門の出版せるものあり  
と云ふ、元ハ歸々稀見のものも今ハ澤田に在るものあり  
きよのそと、但ル蜀山人の三十帖「中」の収めたるを以  
つて、僅かに傳へるのみ、編者の序文を以てて衆道  
調する歌は多く傳へるものとあるか左もあらずし、付



ハリ居るものい多く高僧の撰しむ意歌集も此の  
書に載せしむるもの心ある時あり傳へる、序文を以て  
す、左の如くあり

是をやまとうなるよみ出たることいさ、まむ多から  
ず、まが古く和歌集なるあり、古く大師の御  
才子真雅坊社のときは山のほと歌あり、と云  
やかの色ぬきの爪をつたぐ、花葉のほの歌あり、  
まめなる人よしかたう傳へたることい、傳へけりし、其  
のよも代々の撰集あるのやい、言のま、拾遺集  
から新古今集もわづかにちりまむりなれば、と  
のいち十三代集の中よりつやく見出つあり、七侍々  
す、七ーやありもや侍りけん、伊勢源氏の物語



袂衣、枕の草、故らむも、さまくき、春の事もつ  
くしと書つゝぬらん、と、春の心とくさうはも  
らききりきし云々

とあるを以て見れば、衆道の歌、傳るもの、少る  
きをえらへし、衆道の歌、志と云ふも、志、一、  
孫歌をえらひ、異性を志へつゝ、何れ、おわら  
りや、或人と判ぬ、難く、決り、存、一二、存  
く

恨まず、いかむか人、いとほん、うきも、姫、  
き、おろ、おろ、あ、う、ける

頼めしを待し、口、数の、道、ぬ、ぬ、ぬ、の、病、よ、り、  
律の、春、の、意



絶ぬべきかき

後人不知

思ひ出つときは、は、は、の、春、つ、い、は、は、は、  
せん、春、一、さ、よ、め、を

此、春、の、歌、は、此、春、の、日、段、は、勤、を、さ、す、の、う、も、  
つ、い、の、春、名、の、あ、る、所、以、也

酒、を、舞、山、の、物、若、く、傾、城、羅、息、子、傳、授、の、一、書、也、  
こと、お、つ、と、る、か、か、つ、と、る、を、千、う、れ、こ、と、か、  
い、こ、ん、ろ、う、の、あ、る、と、其、の、房、か、あ、る、と、そ、か、何、ん、と、云  
あ、ま、る、む、わ、り、し、と、あ、る、か、ま、ん、い、か、く、ま、ん、本、書、の、伝  
あ、七、祭、戸、誰、也、其、の、変、り、名、と、あ、り、と、あ、る、其、志、紙



吾い流竹の時代より無名の道者が数人試み此歌  
いふ途多くあつた業の巧みなる動く口の内紅糸の地味多  
るものあるつらういふ事あるも試み此位あるからを  
川流んを汲んぬ華山日この如うの歌書がさういふ  
歌と怪しむ人多ういふ。心ある事かお世目も記の  
世の御宅家の英達この歌を宿殺せん感懐を洩  
すこといふ流竹も出来ることわ、華山が通人らしい事  
を押つてみるのも、花折と耽溺し比揚句の述懐を  
どてるものこといふ事あるも多ういふ。華山が宜い事いふ  
川流竹よりさういふ、華山が流竹よりいふ故味があつた、好  
んが流竹を畫しつゝ此書の中より、ねあの友のこと  
と書く序の華山自身代筆としてやつたこととも



あるくくたの如き、流竹の如きものよ一箇に  
あつたものありし、あみの代筆ともいふ  
し、歌書いふことありたり  
うつり香をまきしあめまゐのかれみおと  
あう歌むむいんきぬさあま  
きうりつ子

回宗者が擬古文にいひしよ、あるおわし、かあり  
えこやのひめこといふ、送著の集「かある。自  
分いかりを此の三書とも併せも花してゐれば、今いふ  
こやのひめこといふ、あつたの如き、送著の集「山宮の  
阿の若心あつた、自今の若心したの、阿の自































十四年 三百九十六万、八千三百七十五  
 十五年 四百二十五万、〇九百十九  
 十六年 四百六十万、百三十一  
 十七年 五百二十六万、四千〇四  
 十八年 五百二万、二千五百八十四  
 十九年 六百四十二万、四百六十三  
 二十年 六百七十五万、六千八百十一  
 二十一年 六百四十四万、二千六百六十六  
 二十二年 六百七十七万、八千四百九十九  
 二十三年 六百九十二万、九千七百七十五  
 二十四年 七百二十五万、〇九百十九  
 二十五年 七百六十万、百三十一  
 二十六年 八百二十六万、四千〇四  
 二十七年 八百二万、二千五百八十四  
 二十八年 九百四十二万、四百六十三  
 二十九年 九百七十五万、六千八百十一  
 三十年 九百四十四万、二千六百六十六  
 三十一 九百七十七万、八千四百九十九  
 三十二 九百九十二万、九千七百七十五  
 三十三 一千二十五万、〇九百十九  
 三十四 一千零六十万、百三十一  
 三十五 一千二百二十六万、四千〇四  
 三十六 一千二百二万、二千五百八十四  
 三十七 一千三百四十二万、四百六十三  
 三十八 一千三百七十五万、六千八百十一  
 三十九 一千三百四十四万、二千六百六十六  
 四十 一千三百七十七万、八千四百九十九  
 四十一 一千三百九十二万、九千七百七十五  
 四十二 一千四百二十五万、〇九百十九  
 四十三 一千四百六十万、百三十一  
 四十四 一千五百二十六万、四千〇四  
 四十五 一千五百二万、二千五百八十四  
 四十六 一千六百四十二万、四百六十三  
 四十七 一千六百七十五万、六千八百十一  
 四十八 一千六百四十四万、二千六百六十六  
 四十九 一千六百七十七万、八千四百九十九  
 五十 一千六百九十二万、九千七百七十五

漢書地理志

漢書地理志のしからしき一増進一  
 二十七年 二千八百七十五  
 三十年 三千九百〇二  
 三十五年 一億〇三百八十五  
 三十七年 一億二千九百八十五  
 今又此國の文化を紙の使用量に徴するに、國民一人當りの消費率の左の如くである  
 明治十三年の 一人三封  
 の 二十年の 二人三封  
 の 三十年の 一人三封  
 の 三十五年の 一人三封三封  
 の 四十年の 一人三封



















かたじけなく中の一よとす

一 山林歌成 歌書歌文 言本一冊

茶居をもゆるの説、昔原の和歌、前は古歌  
よ下は自心も添くは和歌を収む

一 いとせ

四季十二月を拾うしは彩もあつた  
り華も久保田米徳より余米仙の草  
後と思梅もをよこぶ此の十二月平  
凡に澄す意道ゆをそふ

一 吾国義異解 三十九丁

一 古文納論 二十二丁

一 飯有十二合説 十丁

標原製

海島寸珍本 美湖巻の板下也 昔ある寸  
のいふらんが、その板下の存するを以て推せ  
ハ刻するもさうしと見へる

○毎日のま、ろ安きん外 回知の小品 玩具を造るを  
か一向見高きもの。その上、中の杉板屋にハンガリーの  
品の所別があること、さき出うけをえると、そのま、浮山出  
陣てんてみれば、價があるの、席の、あ、ハ九合ある、買  
約通じ、れ、い、やうなもの、ハ、下、七、悉く、ま、んで、あ、れ、僅、か  
に、華、お、の、枝、折、と、木、彫、細、工、の、前、本、屋、と、ト、ー、テ、ン、ポ、ー  
ル、を、推、お、た、ハ、ン、ガ、リ、ー、の、ハ、派、手、ま、の、を、ぬ、あ、も、く、く、  
あ、く、ま、の、つ、れ、もの、が、多、い、人、形、の、股、杖、む、い、あ、れ、の、類、の、七  
赤、毛、が、多、く、目、こ、つ、い、れ、賭、ひ、入、人、に、葉、の、毛、も、赤、塗、り、む



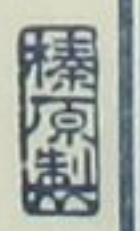








が佛典もさうあるのだから、是を顛倒して鬼子か感  
化を云うけれども、彼れは夷鬼のものとするは、向れと後ら  
ぬれ。彼後伊豆山、二坪内の舊おとを看人とせしめ  
して木下を敷いた。坂路を登つて街道へ出ると  
直に這い節を傳めて傍らの丘を指さし、吾々が三人  
共同の墓地とせん。地をおいた。此家、此家と云  
ふは、熱海木下、此の末に此の道の、秋子も変つたの  
が自分、是れと三十年前のこと、摸あか出来か好  
ておたか、成るよ、此道とあつた。漸やく思ひ流へ  
て追懐の感、伝へる。是もあつた。井ノ邊  
深橋、連一。此の橋、深い谷が、あつた。道の  
溪流が、走ると、鼓の風流の、あつた。此所、夷田、故



東の折橋上、佇立して下眺、此所、あつた。今、全  
く形勢が、変つて、一向、軌味の、あつた。今、全  
いの道、を、歩くと、海、を、遠く、あつた。今、全  
所の、浴場、馬が、浴、を、あつた。今、全  
る、光景、と、その、昔、古人、此、今、あつた。今、全  
ハ、今、見、あつた。唯、此、と、あつた。今、全  
鳥居、尾子、の、別荘、東、の、一端、から、突堤、を、築き、今、全  
小、さ、な、燈、台、が、心、を、あつた。今、全  
重、い、着、め、の、よ、む、あつた。伊豆山、の、旅、館、の、時、を、あつた  
あつた。坪、の、意、を、あつた。別荘、を、築、いた。今、全  
あつた。海、に、湖、を、指、り、此、木、門、が、あつた。今、全  
ことが、出来る。主人、支、拂、り、を、あつた。今、全











出来り、お座いするけん、希冀のさへ、と云ふ、任の  
判りたる、別荘の海に面する、低地である、昔は、  
替りたる、木林林を、伐採して、自然の、故味、横道、  
道、まると、切り、あつ、今も、成り、  
塔、ま、一、五、さ、し、を、お、道、と、共、に、  
ある所も、伝曲の、故味、を、撰、う、一、の、土、窟、を、見  
る、窟、外、の、云、と、洞、と、刻、し、る、石、を、村、の、  
然、ま、の、坐、禪、の、家、と、云、ふ、お、道、の、別、荘、と、共、に、  
の、名、物、と、考、え、る、べき、か、の、思、ひ、だ、な、(二月十七日記)  
○今の、人々の、漢字を、誤用し、字、似、て、死、する、ア、テ、字、を、  
書、い、た、り、す、こと、お、後、を、う、ぬ、る、を、  
合、さ、し、い、え、る、較、べ、つ、と、傳、つ、て、あ、つ、と、  
言



評、さ、い、な、故、味、を、考、つ、て、あ、つ、の、か、り、  
し、ま、い、し、善、通、言、つ、て、あ、つ、言、美、の、  
名、を、い、ら、さ、い、よ、か、ら、い、が、美、を、  
の、施、書、を、讀、ん、だ、こ、ん、ま、か、ら、う、  
つ、れ、の、が、一、つ、あ、る、自、分、の、  
宗、の、法、を、も、つ、ま、時、に、  
ラ、ケ、ソ、ク、と、云、つ、て、あ、つ、  
ま、の、が、ケ、ソ、ク、と、云、つ、て、  
族、から、佛、前、に、供、つ、て、  
華、束、と、あ、る、の、今、考、  
の、比、が、う、つ、か、り、し、  
ハ、ナ、タ、ハ







と居るのみであらう。馬や牛や豚を言ふことを牧畜と見  
ぬば一種であるが、これも農業の一部と見んば、又、  
体農業であらう。

○此夜、北海の夜飯に、寝後、修帯の英文論著を  
を讀み、その興味を覚、終、二十二時、到り、外、  
名の人、実、時、處、就、たる、四五件を抄出す

五米利知のグラント、并、種、の、ビス、マー、ク、は、共  
に、故、魚、の、人、と、云、り、ん、れ、が、本、共、れ、又、の、樂、の、烟、家、に、し  
が、の、自、品、を、受、け、に、何、人、セ、グ、ラ、ン、ト、の、ロ、ス、シ、カ、の  
無、い、所、を、見、れ、よ、の、う、の、と、云、い、ん、れ、。、ビ、ス、マ、ー、ク、は、或  
る、時、人、に、修、つ、れ、大、切、な、烟、草、を、真、身、に、感、ず、る、こ  
と、い、唯、れ、一、本、幾、の、以、時、と、あ、ら、う、。、コ、ー、ニ、グ、ラ、ン、ツ、の、我

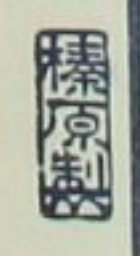


筆、の、人、自、合、の、ホ、ケ、の、ト、一、本、の、ハ、ワ、ナ、が、偉、か、ん、残  
つ、て、あ、れ、自、合、の、人、を、大、切、な、思、ひ、あ、れ、先、が、ら、各、業  
家、が、實、を、獲、す、る、こ、と、に、大、切、な、勝、利、を、  
れ、と、云、つ、て、ん、と、此、業、の、烟、草、の、主、の、不、満、を、是、業、の、  
胸、を、抱、い、て、實、を、手、に、三、十、抱、を、一、に、死、す、る、に、  
思、い、づ、け、る、の、こ、と、の、記、り、の、人、或、る、士、官、が、勇、傷、し  
て、腕、を、折、り、た、ん、を、慰、め、る、の、ん、金、貨、を、掴、ま  
せ、て、も、無、益、な、ら、う、の、の、自、合、の、思、ひ、切、つ、て、大、切、な  
一、本、の、ハ、ワ、ナ、を、歌、し、て、る、傷、者、の、業、を、さ、し  
こ、ん、む、や、つ、れ、時、彼、の、微笑、を、憶、へ、た、女、の、時、不  
い、烟、草、を、食、ひ、ら、う、ら、う、ん、く、思、ひ、た、こ、と、い、ふ  
か、つ、と、



エマーソンとカーライルは親友の交りの生涯は  
いかに云々してあるが千八百三十三年の夏、夕べある日  
カーライルとエマーソンが遊歩すると、一語を  
交へるも先づカーライルから一巻のハイ  
プをエマーソンに著せ、自分も一巻のハイプを  
笑飲しぬ、友人笑飲し笑つて黙り笑し畢つ  
て互いに握手しお休むと挨拶しておんねとあ  
るが、頗る愉快のあり挿話がある

英西の貴族ラッセルが多くの友をその華美の  
ホールの招いたが、友人デニソンもその中の一  
人なり。ラッセルは好む此の詩人又下宿する候  
折をしてあるが、ラッセルは、



此が空めしいろくのよめを形作るもあつたさう  
あの遊興も愛する都の藝術品を鑑賞  
せんた、あつたと云ふと、デニソンは一向乗  
りので、さういふ、いや、私にラッセルは、  
いふすと云ふた、さういふ又ナゼかとラッセルが、  
へ通すも、あつた、私の著書物名があつた  
せんから、私に不貞いびきと云うと、引上げ  
た。

ハックスリー教授がブリッテツレ、イソシエーシ  
ヨンに物名を記して討論のあつた時、教授は  
云々、四十年間の物名を余り云つて、雲々、あ  
つた。云々、時を云つた、余り、雲々、あ







きんじまのかあろうか、きんじまもきんじませくと  
及ばぬ。一勝やつてからのすまゝ、後くと悠々過ら  
す英雄の徳なる世に病し、後とらまじニ一の是  
う、腕のて罪を謝するうあつた。

大詩人のバート、バルンスは、ベイエントと懇親があつた  
常々、ベイエントの兵を寄寓し、酒を飲みかひしれ  
り、突如を、ホムルリ、て、多くの傑作が此頃、出来  
た。見る、関係から、バルンスは、常々、懐中、推してく  
ヌア、フ、ボツリスを、記念、うと、ベイエント、共、一、千、分  
二十五年、ベイエントが、歿、すると、家具、六、巻、く、ラーク  
レヨ、ン、に、出、た。其、由、に、此、の、切、手、入、七、あ、つ、た、が、或、  
あ、一、レ、リ、ン、グ、の、切、手、を、出、した。場、内、の、輿、論、お、お、



一レリリングは、あつた、二、レ、ス、位、を、と、め、ら、う、と、云  
ぬ、氣、配、が、あ、つ、た、の、が、考、証、あ、つ、た、一、レ、リ、ン、グ、を、呼  
ん、だ、と、い、ふ、手、あ、つ、た、と、い、ふ、と、い、ふ、忽、ち、切、手、入、  
バルンスの名のあることを、是、名、に、た、よ、が、あ、つ、た、と、  
い、ふ、大、説、論、を、提、き、た、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、  
又、立、ホ、ン、ト、に、達、し、て、あ、つ、た、と、い、ふ、

那、破、案、に、今、一、突、切、の、故、味、を、解、つ、て、あ、つ、た、と、い、ふ、  
か、一、版、を、試、み、た、動、機、の、土、平、其、か、バル、レ、ヤ、の、公、使、か、  
ハ、カ、と、切、手、を、献、し、た、時、に、あ、つ、た、と、い、ふ、突、切、と、無、任、  
の、此、の、英雄、の、切、手、を、口、に、入、れ、て、い、ふ、と、い、ふ、い、の、か、き、ん  
と、い、ふ、今、も、あ、つ、た、と、い、ふ、別、頭、喉、を、き、き、つ、て、切、手、を、吹  
き、出、した、が、き、ん、と、い、ふ、か、と、い、ふ、と、い、ふ、い、い、か、ん、















benurghant and unaltered to us.

自今の書いじりぬり此の教條を敷衍し以て述ぶる也  
(月十九日相録)

○或十年もの由を歩一きく後々其の内方を志  
徳まうまむ(過)また熱海の津用邸が此年町方へ移す  
けしきり日比谷のむかひに從説を許して長つのみ入の  
七一説一也。建造物も御料もあつた。或は出来は  
るといふくあまの御供もあつた。二甚は千狭の  
このかあるのむかひに階下へ津屋本がたつ。階上  
ま右津屋本がたつ。階上の四椽もあつた。階上  
狭く、此は次きの間が二り程もあつた。長つのみあつた。  
の別荘としてせり。狭く感するものもあつた。

徳川

櫻々鳳凰の文様のあつた紙を張り、津屋本がたつ。不  
る。菊の御紋のあつたのをもてんぬか一向に飾り物もあ  
い。縁枱の木はりむ、漆塗もあつた。長つのみあつた。  
けれ。お庭も漆のまじり。植込もあつた。徳川  
生とらうとあり、石もあつた。此の徳川  
も津屋本がたつ。長つのみあつた。徳川  
千代百坪と云ふが、まじり。徳川  
の建物のお寺もあつた。徳川時代は馬場といふ。平比  
のあつた。徳川時代は馬場といふ。平比  
末幼い所のあつた。も、花が立つてあつた。徳川  
租を納めたる。徳川時代は馬場といふ。平比  
た。徳川時代は馬場といふ。平比







## 元熱海御用邸沿革

光榮に輝く熱海御用邸が今般熱海町に拂下げられました事は私達の最も大なる喜びであると共に且つ皇恩の深さに感泣致しております。

御用邸そのもの、沿革は極めて近代の事に属するのでありますが、その前身たる御殿地と稱してゐた時代にさかのぼると、相當由緒深きものがあります。今より三百三十五年前の今井半太夫宿帳によれば「徳川家康公慶長二年丁酉三月七日より同二十一日迄御殿地に御入湯、其後引續き御本陣相勤候」と見へます。

蓋し御殿地なる名稱が舊記に見へる最初の様です。現在御用邸前にある御成橋は當時家康の通行によつて命名せられたと云ふ事は徳川時代の古文獻によつて明らかであります。其後慶長九年甲辰家康は再び五郎太丸義利、長福丸頼宣の二子を相携へて京師に上る途次熱海に來浴し十七日間御殿地に宿泊した事が伊豆誌に見えてゐます。

此家康の例を追ふて三代將軍家光は寛永三年佐久間氏に命じ御殿を此處に造營せしめた事實があります。然し残念乍ら家光の來駕は遂に取止めとなり、其後官命によつて取毀され、爾來久しく、たゞ荆棘に委せてゐたのでした。

古文書に依り當時の御殿内造營物の大體を想像致しますと御藏屋敷、馬場、馬寄場等があり、その周圍に濠をめぐらしてあつたと思ひます。現在でも御用邸裏門の邊を堀

と呼び、馬場のあつた下は馬場下と呼んで居ります。また、狩場と稱する地名の所が御用邸附近にあります。それは御殿に附屬した狩獵地であつたのです。元祿年間の熱海地誌には御殿屋敷と記されてあります。

其後永い年月が流れて、徳川の末期頃には御殿地も一面の大根畑となり里人がのどかに鋤鍬を以て耕して居りました。然し現在御殿のある地點に郷倉と稱する御年貢米の貯藏倉が二棟ありました。その一棟の大きさは間口二間半、奥行四間でした。その頃熱海は天領、即ち幕府直轄の地であつたので年貢米は直接江戸に船で運送致しました郷倉は明治十年頃まで御殿地にありましたが、小學校が出来るについて取拂はれ、その一つは四五年前まで、荒宿に在りました。

御殿地に於て代官江川太郎左衛門の部下が葦山笠をかぶつて西洋式訓練をやつた事もあつて『農兵場』と呼ばれてゐた時代もありました。何時の頃か此地の中央に本陣今井半太夫が家屋を建てた事がありますが、それが熱海に於ける二階造りの元祖で、その柱は一本の松の木からとりました。

明治十五年頃岩崎彌太郎が、この地を求めて杉や竹を植え、そして皇室へ献上し自分は代地を下賜されました。以後賀茂第一御料地と呼ばれる所以です。

『當時熱海は賀茂郡でした、第二御料地は大湯、第三御料地は梅園です』

明治十年九月三十日に、現御殿の地に熱海小學校が開校されました。立派な二階建の校舎でしたが、明治十二年五月元倉に移轉される事になりました。高臺に在つたのを足場を組んでそのまゝ移轉せしめたさうです。

また、明治十八年發行の『熱海獨案内』によりますと警察署も御殿地内に在つたと云ふ事が判ります。



愈々明治二十一年に於て規模廣壯なる御用邸が竣功し同年十二月二十二日曾我祐準子爵が御見分に出張せられました。この工事は入札により、酒匂の大工某が請負ひました。御殿の建築費坪六百三十圓ともれうけたまはりませす。

明治二十二年一月十二日明宮殿下(大正天皇御幼時の御名)におかせられては曾我氏御陪乘國府津迄鐵道、それより小田原迄馬車鐵道、小田原より人力車にて熱海御用邸に行啓あらせられ御滞在六週間二月二十三日御機嫌麗しく還啓遊ばされました。殿下には御時十一歳同年十一月三日立太子の禮を宮中鳳凰間に於て行はせられました。

翌明治二十三年一月十九日東京御出發即日熱海御用邸着御、御滞在二十七日間、二月十五日還啓。翌二十四年一月八日東宮三度熱海行啓三月一日還啓。

かくの如く、恐れ多くも大正天皇を三度仰ぎ奉れる熱海町の光榮何物か、これに如くものがありませうか。

御滞在中の御つれづれに殿下におかせられては、奴風、トンビ風等さまさまの風を、なごやかな湯の町の空高く御揚げ遊ばされしとの御事、又あまねく熱海の山川に玉歩をはこばせられし由、申すもかしこき御事です。

明治二十三年の頃英照皇太后様には熱海御用邸に行啓遊ばされました。銀付駕籠にお召しなされ一小隊の近衛騎兵御先驅申し上げ、女官大勢しづしづと御駕籠の後に付き従はれて宛然、極彩色の繪巻物の如く御用邸に入御あらせられました。

次で有栖川宮殿下、東伏見宮殿下、久邇宮殿下、華頂宮殿下など各宮殿下が御用邸に

お入りになりました。明治四十三年には三皇子殿下(今上陛下、秩父宮殿下、高松宮殿下)の行啓を辱ふし大正二年にも三年にも皇太子殿下二皇子殿下の行啓遊ばされしは町民の常に歡喜して御惠の露の深さに感ぜぬ者はなく、いと尊き極みであります。星移り、歳かわり、この光輝ある御用邸も愈々公開せらるゝ事になりました。私達は心して此聖地を汚しまゐらすやうな事もなく御惠の尊さを子々孫々に語り傳へて町民は申すに及ばず遠來の浴客の魂を清める淨地たらしめたいと祈つて止まない次第です。

○新巻田の古御成文を高松宮殿下に御覧せしむるに  
一二の拙を贈る中、三浦村の文藝に  
美を施し、一幅あり、こゝろを  
目し、其の也、竹村の余の家と  
文藝の海外に記す、竹村の  
氣を脱す、鴨屋の誤謬と批評のたのめ



















いかに中々、種彦の田舎源氏、元と一世を凡庸にして、もろく得  
る。あんなにすくなく、源氏物語の藝あるが、種彦の苦心を  
こゝにあつた。法一と大奥の事を言ふに、そのころ、その  
書にあらんといふく、そのころ、法一と大奥の事を言ふに、  
いかに無つたに、一般の事を大奥の直言と受えつて、大奥の  
生活を知ると、そのころ、田舎源氏を元と、そのころ、  
大奥の奉仕のころ、マサカ大奥の直言といふころ、そのころ、  
あつたが、保し、ゆゑ、あつたが、種彦の病あつたと、  
くと、神佛の回復を祈るに、人を殺して、代巻せしめ、  
おろし、そのころ、そのころ、そのころ、そのころ、  
く、エライ、そのころ、そのころ、そのころ、そのころ、  
種彦の病あつたと、そのころ、そのころ、そのころ、そのころ、  
種彦の病あつたと、そのころ、そのころ、そのころ、そのころ、

種彦の

いかに中々、種彦の田舎源氏、元と一世を凡庸にして、もろく得  
る。あんなにすくなく、源氏物語の藝あるが、種彦の苦心を  
こゝにあつた。法一と大奥の事を言ふに、そのころ、その  
書にあらんといふく、そのころ、法一と大奥の事を言ふに、  
いかに無つたに、一般の事を大奥の直言と受えつて、大奥の  
生活を知ると、そのころ、田舎源氏を元と、そのころ、  
大奥の奉仕のころ、マサカ大奥の直言といふころ、そのころ、  
あつたが、保し、ゆゑ、あつたが、種彦の病あつたと、  
くと、神佛の回復を祈るに、人を殺して、代巻せしめ、  
おろし、そのころ、そのころ、そのころ、そのころ、  
く、エライ、そのころ、そのころ、そのころ、そのころ、  
種彦の病あつたと、そのころ、そのころ、そのころ、そのころ、  
種彦の病あつたと、そのころ、そのころ、そのころ、そのころ、

種彦の











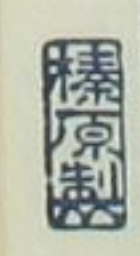
○朝来而少、文章春秋社の流に應じ、逸筆に於て一層  
と筆して郵送す、紙敷に障りあり、多く古く、紙の各  
所々、書畫帖を持し、こゝに揮毫を求む、執筆中  
上座、黙然、狂ひ走り、六書畫紙、おと押、毫、黙、狂、り  
此れを示す

功名は内先生

一代文章新界、殊、有、人、久、と、脱、江、差、悠、と、天、地、也、  
是、好、古、得、柳、源、不、免、春、

至、多、也、叔、又、強、

錦浦、陶、琢、立、(子)物、湖、欲、靈、前、天、下、推、山、海、  
風、光、元、繪、跡、却、好、上、設、就、名、来、



○昔し、後、昔の、類、心、い、ろ、く、隠、語、又、謎、の、や、う、な、よ、を、  
書、い、て、巧、を、争、う、れ、こ、と、が、あ、る、左、の、如、き、も、多、一、例、に、  
平、知、見、ん、か、お、寺、の、お、札、の、や、う、と、あ、る、か、實、の、清、梵、  
の、よ、い、あ、る、

大師、松、長、慶、 南、樂、山

元、奉、祈、念、也、天、守、護、之、依、

阿、伽、羅、施、尼、公、 平、良、寺

此の、頭、書、に、梵、字、と、い、い、ろ、う、あ、る、の、こゝ、に、二、字、を、合、  
ハ、セ、ル、の、い、れ、左、の、下、か、ら、第、二、の、漢、字、と

沈、郎、平、(平、良、寺)、セ、ん、樂、々、(山、樂、南)、依、







書生集巻の巻尾

四書全書の二

創心記

わん神龍を擬して四の物語の筋と五の物語の  
筋とをわきまきく。……是れ二節す。……  
その思ひけり。……其の物語の終りの形が示せ  
ぬてさへ好き化ちあふ入しと。即ちこれ  
表す物出来ぬ。……是れ三節す。

昭和七年七月下旬書めし後

尾山

つんばを七世の物語を得て終る跡をさす。……  
すいことしーナル奇伝の初筋をええんが、……



科展の東洋館に出展したる。標題は……の書  
あり。……の書……の序がある。……  
山田英子……の詩がある。

雄略如君……比校山……河……由未……  
似春花……時……

致身……南仁……見……  
存……一……

英子……

書生集……の挿絵の内田の次に牡丹園の……  
あつて牡丹園……の……  
今の自分……の……  
末寂山の牡丹畑……の……



















文七書の美事ありあるのれ、美んが嘗つて給をりきしにぬ  
めらんはこととす、無の、北海の思入りも、直美あり、荒  
く日祭るととん、先が地あり、無んは、さう、ぬ、昔、地  
日、地、ゆ、と、遠、る、の、地、出、地、元、地、を、流、く、地、よ、と  
し、思、入、ぬ、ひ、を、さ、ん、ぬ、さ、る、ぬ、ち、の、心、柳、地、を、さ  
の、り、か、ら、さ、る、く、と、甚、比、元、来、さ、り、い、よ、あ、地、と、思、ハ、セ  
る。

○生田七平が、家来、地、役、の、帳、を、落、り、受、け、て、来  
て、示、り、さ、ん、た、の、を、見、る、と、藩、多、事、界、紙、二、三、枚、む、さ  
を、綴、つ、れ、小、本、む、ぬ、次、十、七、八、年、頃、か、ら、日、廿、七、八、年  
頃、ま、だ、十、年、間、の、右、泊、者、の、名、が、記、さ、ん、て、あ、る、。又、二  
ハ、自、今、の、町、人、が、い、ろ、く、載、つ、て、あ、り、。尚、時、の、追、憶、を、促、す



セ、の、が、目、ま、山、田、一、郎、が、お、子、の、大、物、お、や、さ、る、あ、れ、次、泊、つ、を、お  
の、り、ゆ、え、ぬ、が、形、持、地、の、未、比、時、の、名、の、見、く、。井、上、田  
一、段、谷、サ、芳、郎、等、と、十、数、名、の、人、と、が、あ、る、か、右、帳、七、保  
な、し、て、さ、る、く、さ、ん、の、お、ち、ら、い、ま、あ、り、あ、る、。生、田、ハ、夜、木、と、地  
の、花、流、を、受、り、ぬ、や、ら、る、と、注、意、し、主、流、を、標、本、を、つ、け  
て、地、図、が、表、題、を、考、へ、ら、る、。不、二、層、も、右、帳、か、ら、と、保  
存、さ、ん、て、あ、る、。前、年、大、隈、辰、右、泊、の、時、の、地、負、や、日、敷  
を、寄、り、て、賞、つ、れ、こと、あ、る、。生、田、ハ、地、活、の、際、一、天、流  
を、寄、り、て、三、浦、観、樹、の、地、が、地、地、の、地、負、の、娘  
を、嫁、と、し、て、仕、つ、て、あ、る、。一、子、を、奉、け、れ、。又、ハ、六、八、年  
と、い、ふ、と、今、の、地、負、が、字、三、の、地、を、や、つ、て、指、う、と、さ、う、の、地、が、あ、る、  
名、の、示、す、こと、と、六、十、八、年、頃、の、時、奉、け、れ、子、が、あ、る、。観、樹



七世世一萬圓の金を死後、燃つる意があつたか、二口分  
の二箱の、襖の入れ、足地を土地の煎煮のしもの、托して  
のりとある。臨終の時、七世の、遺言の印を黄紙の  
紙いと、黄紙を病床に商して、一筆書いて、黄紙のよ  
い、かき、除、観、附、七、物、神、珠、璽、七、金、銀、を、金、二  
圓と考へた。また、七世の、意を、よくも、見ず、其、傳、仕、あつて、置  
は、七、金、を、取、後、祝、族、今、涙、があつて、其、傳、を、遺、言  
状、を、持、出、すと、二、圓、と、ある、の、む、二、千、圓、の、問、も、ひ、あ、つ  
と、判、して、二、千、圓、を、送、つ、た、が、一、萬、圓、を、云、つ、扱、つ、た、と、云  
ふ、と、今、む、一、笑、話、と、考、へ、て、ある、と、語、つ、た。  
○家、元、の、池、大、雅、の、彫、つ、た、珠、意、の、印、が、ある、印、文、は、萬、物  
一、馬、と、ある、當、つ、て、襖、語、集、を、開、くと、七、世、の、意、と、考、へ、



又、七世の、解、説、の、其、つ、た、或、つ、時、人、の、為、の、扁、額、を、  
押、毫、の、時、に、七、世、の、四字、を、録、つ、た、と、云、ふ、が、じ、う、轉、輾、し  
た、か、五、山、好、友、傳、即、大、井、十、子、校、の、杉、山、齋、大、の、千、二  
入、り、這、の、の、書、を、考、へ、て、七、世、の、意、味、を、聽、か、と、考、へ、  
申、つ、た、が、お、事、考、へ、置、くと、再、度、疑、ん、か、未、だ、の、む、捨  
て、置、つ、た、と、考、へ、る、と、考、へ、つ、た、と、云、ふ、の、意、は、お、  
も、を、襖、語、の、謎、の、や、う、な、こ、の、心、を、理、解、し、七、世、の、意、  
を、言、ひ、現、の、一、難、い、こ、の、心、を、理、解、し、七、世、の、意、  
八、世、の、意、を、考、へ、る、お、馬、を、約、して、襖、語、の、意、味、の、む、あ、  
と、云、ふ、意、を、考、へ、る、と、考、へ、る、と、考、へ、る、と、考、へ、る、と、考、へ、る、  
た、甲、斐、資、考、の、一、行、の、紙、の、下、部、に、景、景、文、が、猫、を、考、  
へ、と、考、へ、る、の、意、を、考、へ、る、と、考、へ、る、と、考、へ、る、と、考、へ、る、  
と、考、へ、る、と、考、へ、る、と、考、へ、る、と、考、へ、る、と、考、へ、る、と、考、へ、る、







秋壽伯の別荘、伊豆山(山)の(山)武の玄(山)  
今後由某の(山)と(山)とある鳥尾の(山)相換  
尾、(山)と(山)の(山)の別(山)

- 熱海の(山)を(山)共(山)の(山)成(山)梅(山)
- (山)茶(山)神(山)を(山)祠(山)と(山)言(山)遠(山)立(山)の(山)碑(山)
- 拓(山)本(山)道(山)途(山)が(山)彼(山)の(山)行(山)者(山)を(山)書(山)く(山)時(山)木(山)登(山)  
り(山)を(山)や(山)つ(山)れ(山)老(山)樟(山) (山)道(山)途(山)が(山)樹(山)上(山)に(山)生(山)じ(山)と(山)ある(山)言(山)
- 木(山)の(山)宮(山)境(山)内(山)に(山)道(山)途(山)連(山)れ(山)大(山)老(山)木(山)の(山)葉(山)下(山)
- 成(山)る(山)観(山)村(山)旧(山)軍(山)の(山)詩(山)碑(山)
- 錦(山)と(山)油(山)と(山)ある(山)芭(山)蕉(山)の(山)句(山)碑(山)
- 熱(山)海(山)と(山)松(山)を(山)別(山)天(山)地(山)の(山)思(山)を(山)為(山)す(山)閑(山)雅(山)の(山)地(山)を  
等(山)が(山)熱(山)海(山)の(山)根(山)岸(山)と(山)呼(山)ぶ(山)所(山)

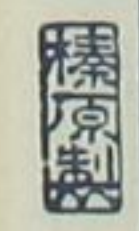


- 成島神社の青像熱海化りの一部その輝毫  
の熱海の詩

- 丹那トロン掘取の考め地形の差(山)字(山)換  
扱(山)送(山)前(山)と(山)比(山)較(山)し(山)て
- 熱海の(山)ペ(山)ー(山)セント (山)和(山)田(山)庄(山)の(山)溪(山)谷(山)と(山)水(山)車(山)の(山)景(山)
- 今(山)の(山)山(山)と(山)し(山)ら(山)の(山)人(山)車(山)鐵(山)道(山)の(山)景(山)象(山)
- 梅(山)子(山)の(山)上(山)の(山)方(山)地(山)の(山)景(山)象(山)輕(山)井(山)津(山)実(山)の(山)野(山)  
の(山)景(山)象(山) 亦(山)に(山)梅(山)子(山)を(山)見(山)お(山)り(山)し(山)る(山)景(山)
- 初(山)島(山)の(山)趣(山)景(山)を(山)島(山)中(山)の(山)内(山)容(山)
- 多(山)賀(山)村(山)の(山)海(山)岸(山)の(山)松(山) (山)熱(山)海(山)の(山)海(山)岸(山)を(山)見(山)  
り(山)し(山)る(山)景(山)象(山)を(山)写(山)す(山)る(山)所(山))
- 熱(山)海(山)の(山)丹(山)那(山)ト(山)ロン(山)開(山)通(山)ア(山)テ(山)込(山)み(山)行(山)り(山)の(山)行(山)き(山)か(山)た(山)



人て日と夜を風と雲が暮れ今ある山が思ひ別れ  
 合謀地とろろくしてある。十四五年前にふいふと  
 思つたよふか今の路を志す海にゆしてある。今衛戍  
 所流のちるまらうの山麓に谷の、伊豆山の入口の  
 お流橋々下の深の熱湯、今おの園の上のあの家  
 の前であつた所の●跡傍の井井をいひ、路を昔か  
 あこがれ此所だが、こん昔も曾うと捨ぬらきる。又  
 うんおして二む比。もうわー心して風改あるそを括  
 えうもるふんんかあつたら。昔一を思ふせめても  
 の記念ともうん比とう比。こんと思おとせうす一範  
 圍をひろめていろくのよふをせめて捨とごきん  
 えんんむ四里きれいよふんん。閑あるまほせを捨



つたのね海と清在の定終のむむあつた(一月廿四日)



# 早稲田附近の 飲食店分布圖

今 和次郎

この調査は昭和六年六月下旬岩田義之君の勞になり、それを同時期に於て多少の補成したものである。二三の誤なきを保しがたい事をお許しを乞ひたい。

## 1 五年前のしらべ

嘗て紹介した事があつたのは大正十五年(一九二六年)の春ですが、あれからも完全に五年餘りです。また、く間に月日が流れる、——お互ひも五年前と現在とは、あらゆる點で、或は何かの點でちがふやうに、——早稲田大學のぐるり一キロ直徑の圓内の様子も大分變つた動靜を示しました。五年前の學報をくつてみますと、……大圖書館、グラウンドの鐵骨スタンド、製圖教室及學生ホールは新たに竣工し、大隈記念大講堂の基礎工事も着々進行中で、その鐘の鳴る高塔が學園の中心に聳えるのがうち仰がる、のも近き將來にある。……とかいてありますが、それも今では思ひ出に包まれてゐる風景でその後、演劇博物館の姿が眺められ、そして昨年は新しい文學部の建築も竣工して、境内の威容も一だんと整つたのでした。

それからまたその當時、……特に學生ホールは營まれ、そこに大規模な食堂が開かれた。その話をきき、その實現をみて、早稲田界限のレストランや食堂その他々々が青くなつた。どんな事になるのか、とは必ずしも界限の喰べもの屋のみではなかつたらう。……とかいておいたのですが、今にして思へばそれも回顧的な事に過ぎてしまひました。

その後、即ち五年前の早稲田附近の飲食店の分布圖を作つてみてから、それをきつかけに、銀座一帯のしらべ、新宿のしらべ、神田の學生街界限などの状態をしらべてみる機を得ましたが、之れらによつて、早稲田附近の状態と云ふものは、特別に著しい現象を呈してゐるのではなく、東京の一區域、或は日本の都市の一部としてのあたり前の状態を示してゐるのだと云ふ考へになつて來ました。

## 2 例へば銀座の場合

最近銀座一帯の第二回目的の分布圖を仕上げましたが、出來上つたそれをながめてつくづく感じたのでしたが、現代都市に於ける享樂的部面の設備としての現はれを大きく鳥瞰すると、中世紀の大伽藍の内部に仰がる、ところの裝飾の見事さも眺めるときと同じ類の感興が湧く。エネルギー發露の巨大さに於て、そしてあれもこれも時代の必然さを含むことに於て、對比されていゝものやうだ、との妙な感激が、實際一軒々軒並にひろつて記入して綜合された圖面をながめたときの感激として起るのです。

しかも銀座に於けるテムボの見事さは、早稲田の幾倍です。後で對比でお目にかけるやうに早稲田でも随分増えましたが、銀座











ライオンベーカーリー	花月堂	光園	サロニヤ	三河屋	ボビエ	ドム	金泉堂	フローラ	ナボ	パラー	ライオンベーカーリー	カイン	浩養軒	ダカ	カテ	高田舎	三勝	ミソ	シバ	オアシス	サナミ	フナ	ダサ	
ライオンベーカーリー	梅月堂	クラ	精養軒	マンハッタン	セカイ	東瀾閣	ルモン	三島	ベール	ハレ	チク	ユリ	キツ	ライオンベーカーリー	A B C	白孔雀	ボン	パツ	松の	ルジャ	イナ	鉢	ライオンベーカーリー	ユリ

高砂食堂	三島食堂	グランド食堂	ハツビー	大國屋	稲門ホール	ムサシ食堂	學生ホール	第一食堂	東家	高野	ニートリ	大野	都野	岡田	長岡	食	ブラ	コ	黎	ボ	無名	ハ
公衆食堂	タマル	新昇軒	家庭	星野	三春	輕井澤	丸高	梅花	百塚	前川	野口	キヨ	明安	早玉	八幡	堂	リ	マ	ポ	茶寮	ツ	
(以上 四十軒)																						

○来る四月に行ふ大隈展覧會十年の祭りの候の基  
 城に記念碑を樹す計畫が、碑石の設計も既に成り  
 撰文は松平康圓に嘱せられた。その手紙に「文務ハ  
 何れも一應を済ませ、長らくの祭典前日の事が書か  
 れてあるのへ、吉日既と建設に入らるる碑とせん、お  
 かしい。實の祭典後、速つべき碑を、おぼへるる  
 筆を續する関係上、当日も必すおぼへるる其の  
 示し此いと考へられたか、おかしき譯もある。当日の撰文  
 を書かぬ、碑の意味からいへば、じちちと碑石を  
 無刻の墓域、樹て、おぼへるる展覧會の大衆に示し  
 後、文を刻する、と云ふ、と云ふ、と云ふ、其の撰文の



左の如く

碑之墓故侯興夫任一段

侯爵大隈重信公已薨之十年  
回民景慕會為脩祭於日比谷  
公因宴又和七年四月十日也公  
相而朝勤業炳耀其退而在野  
也考其功又隱然動天下祭之日  
四方未奠拜者萬數其遺德  
久而益顯如此今也回步艱難  
內外多虞回民之思公而不已  
者良有以也夫

大隈

今日坊間教業中大隈防一段を得印宛左の如

石材橋鈕

文云 聖賢為骨 英雄為膽

松屋深田堂刃









越佐叢書内容目録

越後地名考

佐美東正蓮著 三卷

文化十三年の著述にして、嘉永の初、正蓮の男、馬主の校訂せしもの、最も能く纏りたる一種の地誌なりと稱せらる。

越後治亂記

穴澤長河著 三卷

長尾爲景より景勝時代までの事蹟を記述せしものなり。(未刊書)

越後野志

小田島允武著 十九卷

允武は松翁と號す、北蒲原郡水原の人なり。本書項を分つ二十、國、郡、莊を首とし、地理、編年略記、山川、名所、古跡、神社、佛閣、驛路、諸城等に及び、最後に異物を收む。越後に於ける此種の記録としては、最も具備せしものにして、賴支峰、爲めに之を校訂せり。(未刊書)

北越風土記節解

丸山元純著 一卷

何時の頃よりか、越後風土記の殘缺として傳へらるるものなるも、恐らく後人の偽撰なるべし。本書は此の風土記を校正補注せしものにて、貞享三年の著作なり。

越後名寄

丸山元純著 三十一卷

元純は寺泊の醫師なり。本書は越後の國土、山川、神社、佛閣、舊跡より禽獸草木に至るまで記述せしものにして、越後地誌としては關山開道の祖と爲せり。寶曆六年の自序あり。(一部刊行)

北越太平記

雪庵著 十七卷

兵學者流の著撰ならんか、不識公の記傳としては世上に流布さる軍書の稱首となす。寛永二十年の自序あり、本書は其後の追補を採る。延寶頃の開版ならんといふ。

後越碑銘集

釋勸勵著 二卷

勸勵は鷲峰と號す、中蒲原郡小合村小戸高陰寺龍臺の弟、後、刈羽郡田澤村祐光寺に住す。初卷一に文化十四年の自序あり。

北越月命

小泉蒼軒編 二卷

蒼軒は其明の男にして、南蒲原郡今町に住す。本書は、屋代弘賢の問答事項に基き、越後一國の風俗を記述せしものなり。(未刊書)

越後國風俗問狀

秋山朋信編 一卷

朋信は景山と號し、長岡藩儒なり。文化十四年幕府の祐筆屋代賢實が、簡條書を以て諸國の風俗を問合せし時、長岡藩より差出せる答書なり。(未刊書)

越の風車

伴喜内著 前編八卷

喜内は長岡藩士なり。本書は越後に於ける奇聞珍談を記述せしものなり。明和八年の自序あり。(未刊書)

越後摘誌

鈴木平造著 二卷

平造は山形縣の人にて新潟に寓居せり。本書は新潟縣各大區の區分に依り風土民情、即ち地理、物産、風俗、人情より風景等を網羅摘錄せるものにして、明治十年八月に出版せしものなれば、明治初頭の新潟縣を知る好資料



なり。卷中幾多の風景圖を挿入す。

越後古實聞書

一 卷

天正六年謙信の死後、慶長五年までの史話を収めしものなり。(未刊書)

越後の山風

四 卷

明治戊辰役、北陸道鎮撫總督參謀として來越せし山縣狂介後の有朋公爵の戦争日記にて同年一月二十七日より、十月七日に至るまでの行動を手記せしものなり。謄本は參謀本部に藏す。(未刊書)

由舊刀錄

四 卷

餘慶は長岡藩士なり。本書は藩の老職山本老迂齋の命に依りて選述せしもの、歴代藩主の治蹟、藩風、並に藩話の要道を記せしものなり。老迂齋の實歴十年の序あり。(未刊書)

芝田年代記

一 卷

一名蕉鹿年代記と云ふ。安田官十郎之を校訂す。本書は文祿元年より弘化二年に至る二百五十年間の新發田に關する記録なり。(未刊書)

明和旭湊俚諺

五 卷

新潟港に於ける涌井藤四郎の明和の一揆騒動を記述せしものなり。(未刊書)

佐渡志

十五 卷

美清は葵園と號す、佐渡相川の吏人なり。本書は文政年間の著作にして、男美蒼之を補修す。明治六年政府此の

書を徴せしが、佐渡の地誌としては白眉の稱あり。明治に入りて刊行す。

佐渡地志

横地 玄 常著 一 卷

並常は佐渡相川の醫師、元祿前後の人なり。本書は佐渡の地理的事項を雜記せしものなり。(未刊書)

佐渡事略

石野 廣 道撰 三 卷

廣道は佐渡奉行なり。安永十年四月相川の陣屋に着し、翌天明二年に歸府するまでの間の見聞を記せしものにして、上卷には地理、下卷には見聞録を収め、別録に金山のこまを記せり。(未刊書)

佐渡風土記稿本

神保 泰 和著 二 卷

泰和は西蒲原郡岩船村船越の人なり。本書は佐渡の地誌中、最も整ひしものと稱せらる。文政六年の選著なり。(未刊書)

佐渡年代記

十 卷

慶長六年より嘉永三年に至る間の佐渡奉行所の記録なり。(未刊書)

新發田先達遺事

渡邊 黙 容著 一 卷

默容は新發田藩學の教官なり。本書原公道の先哲叢談に倣ひ新發田に於ける先輩の偉言、現行を記せしもの收むる所四十有一人なり。漢文。(未刊行)

北越雜記

長沼寛之 輔著 十九 卷

本書は雜記といふも、越後の地誌にして、文政年中の著作なり。(未刊書)



新浦情話

今村 淀 七著 三卷

淀七は長岡藩にして新潟奉行たり。在勤十三年、本書は新潟漢の地勢、民情に就て記述せしものなり。(未行刊)

越後土産

紀 興 之編 二卷

興之は會津の人なり。本書は新潟の風土、即ち諸大名、古城跡、市街より各地の名物、料理屋、妓樓、重なる藝娼妓の名、方言等に至るまで記せしものにて、繪圖を挿入す。文政年間の刻本なり。

順徳天皇御遺跡搜索之記

加部 巖 夫著 一卷

明治十一年聖駕北巡、九月十六日新潟に御着、十九日まで驛を駐めさせ給ひし、けふ佐渡の國へ御用の筋にて富小路侍従に加部巖夫をそへてつかはされたり……しきりに承久のいにしへをしのばせたまひて、かしこくも御袖をうるほしたまひしほどのことなれば、さめては承久帝のふるき御蹟をたづねしめたまはん、追遠のおほみこころにいてたることなりと……」と陸路通記に見えたり。著者は聖意をかしくみて御遺跡搜索の次第を記述せしものなり。

順徳天皇の眞野山御陵

萩野 山之著 一卷

由之は佐渡相川の人、國史學の大家なり。本書は眞野御陵の考証を通俗的に記述せしものなり。公刊書中に收む

乙寶寺縁起

著者不明 一卷

北浦原郡乙村に在る乙寶寺の縁起にして、原本は乙寶寺に藏す。(未刊書)

越後の國土と彌彦神社

吉田 東 伍著 一卷

東伍は北浦原郡安田の人、旗野康堂の弟なり、後、吉田氏を襲ぐ。本書は、北越新報の需に依り、越後の國土と

彌彦神社との關係を主題として記述せしものなり。

櫻井古水鏡

一卷

本書は彌彦神社の神官たりし高橋光則の著なりと云ふ。越後一の宮なる彌彦神社の敷地の興廢及び神事其他今昔の事を問答体にて記したるものなり。(未刊書)

長久山曆代譜

一卷

南浦原郡本成寺村に在る日蓮宗勝芳派の本成寺の舊記にして、原本は本成寺に藏す。(未刊書)

中臣祓講義

竹内式部口授 一卷

式部は蓋齋と號す、新潟の人なり。本書は式部の口授を門人鶴飼貞義の筆記せしものにて、全篇に亘り、式部自から朱筆を加へて訂正せり。此の筆記は、寶曆十三年の交のものならんといふ。(未刊書)

柏崎諏訪神社考

生田 萬著 一卷

萬は上州館林の藩士にして、平田篤胤の門人なり、後、柏崎に寓す。本書は柏崎の諏訪神社を考証せしものにして、萬自筆の稿本は柏崎の中村家に藏す。(未刊書)

青海神社考

小池 内 廣著 一卷

内廣は南浦原郡加茂の人彌彦神社宮司となり、又皇大神宮禰宜となる。本書は縣社加茂の青海神社に關する考証なり。

宮巡詣記

橋 三 喜著 一卷

長岡郊外、悠久山蒼柴神社の境内に在る一樹社は三喜を祀れるものなり。本書は三喜が延寶三年より元祿十年に



至る二十三年を閉し、全國の一宮を巡拜せし紀行文なり。

神名帳考證

度會 延理著 一卷

度會宮内人桑原弘雄の校訂せしものにして、本書第六卷、越後及佐渡國の部を收む。刊本あり。

神祇寶典

徳川 義直著 一卷

義直は尾州侯にして權大納言なり。本書は、帝國圖書館本を底本とし、内閣本を以て校正せしもの、爰に收むるは、第六卷、越後及佐渡の國の部なり。刊本あり。

本誓寺記

高田市に在る四派本誓寺の舊記なり。(未刊書) 一卷

居多神社々傳

居多神社文書 一卷

中頸城郡居田村に在る居多神社に關する社傳並に古文書なり。(未刊書)

越後村名盡

新潟 富史 寺門 靜軒著 一卷

本書一名源義綱勳功記又は海戰記ともいふ。加茂次郎義綱の武勳を記せし軍談書なり(未刊書)

新潟富史

靜軒は江戸の人なり。本書は世稱慈界の仙都と謠はれし新潟繁富の狀を記せしものなり。安政度の刻本あり。漢文。

八百八後家新潟後の月見

甘泉 醉翁著 一卷

牧之は南魚沼郡鹽澤の人なり。本書は越後に於ける雪に關する一切を記述せしものにして、京山、爲めに校訂潤色せり。天保年間に上梓せり。

北越雪譜

鈴木 牧之著 前後七卷

越後奇談

橘 茂世著 六卷

茂世は眞嶺と號す、南蒲原郡三條の人なり。本書は部を分つ五、七奇の辨を首となし、異聞異事を搜羅す。柳亭種彦爲めに校して之を行へり。文政六年の刻本なり。

佐渡奇談

田中 美清著 三卷

佐渡に於ける異事奇談を聞くがまゝに記せしものにて、萩野由之之に附注せり。雜誌「越の海」に收む。

越後孝婦傳

三島 孝一著 一卷

三島郡尼瀬の孝婦由里の行狀を記して天下に頌ちしもの、幕府の儒官、大學頭林忠の撰にかゝる越後孝婦傳を收む。寛保、安政兩度の刻本あり。

久米家復讐一件

久米 幸太郎著 一卷

久米幸太郎は新發田藩士なり。三十餘年の長歲月を費して父の仇の行術を搜れ、終に讐討本懐を遂げたる顛末を記せしものなり。(未刊書)

後越藥泉

小村 英菴著 一卷

英菴は長岡町の人なり。本書は古志、三島、蒲原、岩船七郡の藥泉、即ち溫泉、冷泉の所在並に鑑定を記せしも



のにて、文政十三年の著作なり。(未刊書)

越後人物志

吉田 楳 齋著 一卷

弘化度前後に於ける越後の人物を列記せしものなり。

東北遊日記

吉田 松 陰著 二卷

嘉永五年正月、長藩の吉田松陰が、下總より會津を経て越後に來り、更に佐渡に渡り、眞野御陵を參拜し、歸途出雲崎に出で、葡萄峠を越えて歸府せし日記なり。漢文。慶應四年に上梓す。

海府遊記

高橋 克 庵著 一卷

克庵は江戸の人なり。本書は、安政四年丁巳六月、海府の勝を探れる遊記なり。末尾に頼鶴崖及岡鹿門の海府遊記を附すべし。

彌彦神系考

鈴木 重 胤著 一卷

三元素略説

廣川 晴 軒著 一卷

晴軒は北魚沼郡小千谷町の人なり。本書は萬延元年の著述にして、熱と火と電氣の三者は、其本質に於て根本的同一物なりと説破せり。是れ西洋に於て、殆んど同時代に發見せられたるエネルギー相關説にして、晴軒は此書に依りて、世界的の理學者となれり。慶應年間に上梓す。

算法圓理三臺

佐藤 雪 山著 二卷

雪山は北魚沼郡小千谷の人、關流の和算家なり。其遺著、一括して學士院に贈られし爲め、斯界の認むる所となり、學界に重きを爲せり。本書は其一にして、刻本なり。

温古の一葉

大平 與 文 治編 三十六卷

與文治は三島郡浦村の人なり。温古の葉は、毎月刊行の雜誌形のものにて越佐兩國に關する郷土資料を收め、三十六卷を以て終刊せり。

三五葉雜記

荒川 實 著 一卷

關東雜記

藤田 實 著 一卷

關西雜記

藤田 實 著 一卷

關東雜記

藤田 實 著 一卷

關西雜記

藤田 實 著 一卷

東北遊日記

吉田 松 陰著 二卷

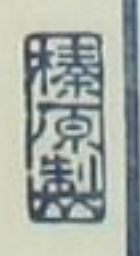
越後人物志

吉田 楳 齋著 一卷



○善本重影の才一輯と配本して来た。この四版  
 あり美次印宅に於て表等十枚の好書打寄り  
 日雨後毎月古古の研究をすし、又善本ハ世の  
 或るかを獲物もして合するに配り世の好書家  
 にも頒給し、先づ出たよふに一輯のあり、毎  
 輯十二枚のプレートを収め、版向の才一輯又  
 いたの如きよふがぬのてある

源氏物語 元和活字印本二葉 西田義  
 三十六歌仙 嵯峨本 一葉 日上  
 竹富 古活字本A 一葉 徳富  
 口 口 一葉 新嘉坡  
 天辰 北宋刊本 二葉 日上



一、毎月一回、八月九月休刊、一年即ち十回を以て一期とす。

一、毎回、四六倍上質洋紙約十二枚、並に解説とす。

一、毎月實費金壹圓、申込者のみに之を頒つ。

郵送希望者は郵送料金拾伍錢増。

一、印刷部數三百部。

日本書誌學會

諸	新	安	永	川	林	市	諸	新	安	永	川	林	市
橋	村	田	山	瀨	瀨	島	橋	村	田	山	瀨	瀨	島
轍		善	近	一	若	謙	轍		次	彰	馬	樹	吉
次	出	郎	郎	彰	馬	今	次	出	郎	郎	彰	馬	今
鈴	樋	樋	長	鹿	德	井	鈴	樋	樋	長	鹿	德	井
木	口	井	澤	島	富	貫	木	口	井	澤	島	富	貫
重	龍	清	規	則	猪	一	重	龍	清	規	則	猪	一
孝	太	五	矩	泰	一	飯	孝	太	五	矩	泰	一	飯
	郎	郎	也	泰	郎	田		郎	郎	也	泰	郎	田
		三	内	高	和	良			三	内	高	和	良
		村	野	木	田	萬			村	野	木	田	萬
		清	五	利	萬	吉			清	五	利	萬	吉
		三	郎	太	吉	平			三	郎	太	吉	平
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太	吉	
		郎	三	太	吉				郎	三	太	吉	
		三	郎	太	吉				三	郎	太		



○善本重影の才一輯と配本して来た。こゝの四脈  
ある善次郎宅に於て表等十数的好書打寄り  
日雨後毎月古古の研究をす。又善本ハ世の

山谷集 高利大家本 三巻 徳富  
誠齋集 高利本 二巻 口上

あの所賣も僅かばかりの今更をたり斯の影  
勝をゆる得るは仕合せなり。ゆゑ公の徳をあんき、  
永後でも、教養七半。ハハハ終始するは、遠慮する  
こゝにては、永後とゆへなり。 一月廿八日記  
○空海圖書館今次圖書館内を全とあり全書と漢  
書の伝次と為り種々の書物を寄託する事なり。  
の故に、証書役の志料、長日保一馬(馬)の心を  
徹するの材料なるものなり。乃ち左の之んを扱ひ  
す。

一月廿九日



○善本影の才一箱と配本一と未と。家八四版

明治七年 征臺役關係資料展觀目錄

1 臺灣紀聞

刊 一冊 〇七〇—四八

本書ハ「新聞雜誌」ノ附録トシテ長崎滿川成種ノ編セルモノノ刊行ノ年月ヲ詳ニセザルモ書中琉球人ノ臺灣漂著ヲ指シ一昨辛未トナセルヨリ明治六年ノ編纂ナルベクマタ征臺事件ニ關シテハ一言ノ之ニ言及スルモノナキハソノ前年ノ刊行タルヲ證スルニ足ル記事概テ簡略當時筆者ガ泉州人某ヨリ聞知セシ處ヲ主トシ之ニ長崎先民傳、萬國新話、海外異傳等ノ舊記ヲ參照シテ編述セシモノ

2 臺灣地誌草稿

寫 一冊 〇七四—二八

本書ハ明治七年征臺役ニ先テ渡臺セル當時海軍省通辨タリシ水野遵氏ガ西部臺灣ノ地理、歴史、物産等ニツキ實地調査シタル記錄ニシテ水野家ノ舊藏ニ係ルモノ

3 臺灣風土記

刊 二冊 〇七四—一〇

明治七年征臺役ニ際シ次項「支那及日本の開港場」ノ一部ヲ島岬泰ノ譯述刊行セルモノ



4 支那及日本の開港場

英 文 刊 1冊 972-16  
英國領事官「メーアース」等ノ記述ヲ「デンニー」編集シ一千八百六十七年（慶應三年）倫敦ヨリ出版兩國ノ開港場及北京、江戸、香港、「マカオ」ノ狀況ヲ詳述シタル案内記ナリ

5 イースタン・シース

英 文 刊 1冊 491-22  
英國軍艦「ドワーフ」艦長「バックス」ノ著同艦ノ支那、日本、臺灣及露領沿海州ノ巡航記ニシテ巡航中征臺役ニ際會シタルヲ以テ書中臺灣及征臺ニ關シ詳細ナル記述ヲナセリ一千八百七十五年（明治八年）倫敦出版

6 臺灣島略説

扇面一枚刷 〇七四一-七二  
明治七年九月森村儒司ノ編述刊行セルモノ

7 開拓使舊藏臺灣地圖

刊 四枚 〇七四六-七六  
本圖ハ征臺役ニ際シ官邊ニ於テ調製開拓使ニ配付セラレ久シク北海道廳ニ保存サレシヲ最近函館圖書館ヨリ本館ニ寄贈サレタルモノ

8 掌中臺灣全圖

刊 一折 〇七四六-六三  
本圖ハ明治七年五月高田義甫ノ撰題名ニ示ス如ク堅十八種幅二十七種ノ小圖版ナルガ記載頗ル詳密ナリ昭和四年前總務長官賀來佐賀太郎氏ノ斡旋ニヨリ箕輪篤三郎氏ノ寄贈ニ係ルモノ

9 臺灣地圖

英 文 寫 一枚  
本圖ハ後ニ臺灣民政局長トナレル水野遵氏ガ明治七年征臺役ニ際シ終始携帯使用シタルモノニシテ「ジョン・ストーン」ノ傳道地圖ヲ複寫セルモノ水野家ノ舊藏ニ係レリ

10 北部臺灣地圖

寫 一枚 〇七四六-七〇  
本圖モ亦當時水野氏ノ使用セシモノ水野家ノ舊藏ナリ

11 西郷従道書牘

一通  
明治七年九月七日西郷郡督ガ陣中ヨリ野津少將等へ宛テタルモノ〔臺灣總督府博物館藏〕

大山綱良書牘

一通 三  
五月十日附鹿兒島參事大山綱良ヨリ笠野熊吉ニ宛テタルモノ〔尾崎秀真氏藏〕



12 水野遵書牘

一通 〇七四二—一九八  
明治七年六月當時西郷都督ノ許ニ在リテ蕃地事務ニ執筆セシ氏ガ那瑞著後六月四日迄ノ軍狀ヲ内地近親者ニ報知シタルモノ水野家ノ舊藏ニ係ル

13 同

一通 〇七四二—一九八  
十月七日附龜山本營ヨリ父君博道翁ニ宛テ當時征臺軍ノ全般ニ涉ツテ概記セシモノ亦水野家ノ舊藏ナリ

14 樺山資紀日記

寫 一冊  
本書ハ征臺役ニ關シ當時陸軍少佐タリシ筆者ガ同事件ニ關シ東奔西走シ更ニ命ニ依リ渡臺各地ヲ探險調査シ討伐ニ參加シタル間ノ詳細ナル日記ニシテ乃チ明治五年七月二十五日起筆同七年十二月四日熊本鎮臺ノ招募砲兵ノ解隊ニ至リテ擱筆セルモノ當時ノ志料トシテ最モ重要ナルモノニ屬ス〔臺灣總督府史料編纂會藏〕

15 臺灣史と樺山大將

刊 一冊 〇七四二—一五九  
昭和元年藤崎濟之助氏著全卷ヲ四編ニ分チ第一編ヲ臺灣史トナシ第二編ヲ明治七年ノ征臺史トシ約四百頁ニ亘リ樺山大將ヲ中心トナシ本事件ノ顛末ヲ記スコト甚ダ詳密ナリ第三編ニハ南澳蕃探檢事蹟ヲ第四編ニ初代

16 明治七年 地方事務日誌

寫 二冊 〇七四二—一〇〇  
征臺軍蕃地ニ上陸スルヤ都督府ニ地方課ヲ設ケ主トシテ地方關係ノ事務ニ當レリ本書ハソノ設置ノ七年五月十二日ヨリ十一月二十九日ニ至ル同課日誌ノ一部ニシテ征臺志料トシテ最モ信憑スベキモノ水野家ノ舊藏ニ係レリ

17 明治七年 征臺醫誌

刊 一冊 〇七七九—一四  
本書ハ當時陸軍省十二等出仕トシテ征臺軍ニ從事シ終始野戰病院ニ在リテ具ニ辛苦ヲ嘗メタル落合泰藏ガ主トシテ我軍ノ醫事衛生ニ關スル日記ニシテ明治二十年陸軍々醫學會ニ於テ會員ニ頒布ノ爲メ印刷ニ附シタルモノ

18 明治七年 生蕃討伐回顧録

刊 一冊 〇七四二—一三〇  
征臺事件ニ關シソノ外交方面ノ記事ヲ録セルモノハ二、三ニ止マラザルモ專ラ討伐ノ狀況ヲ記スルモノ甚ダ尠シ本書ハ戰地ニアリテ軍醫ノ職ニ當リシ落合泰藏ガ當時ノ日誌ヲ基トシ大正九年編修刊行セルモノ



19 征蕃私記稿本

初代民政局長水野遵氏ガ自ラ征蕃事件ニ關係セシ當時ノ舊記ニ依リ明治十二年七月編次セルモノ間々略圖ヲ挿入シ以テ記事ノ補足トナセリ樺山資紀日記ト共ニ貴重ナル資料ニシテモト水野家ノ舊藏ニ係ルモノ

寫 四冊 ○七四一—九九

六

20 大路水野遵先生

明治二十八年改隸ニ際シ辦理公使、民政局長ノ大任ヲ帶ビ樺山總督ト共ニ來島セシ水野遵氏ノ傳記、詞藻竝ニ其遺稿「臺灣征蕃記」ヲ經メ昭和五年大路會ヨリ出版セルモノ本傳ノ内容ハ小森德治氏ノ執筆ニ係リ一面改隸當時ニ於ケル本島ノ事情ヲ併述セルヲ以テ又當時ノ狀勢ヲ窺フベク遺稿ハ別項「征蕃私記稿本」ニツキ複刻セルモノナリ

刊 一冊 ○七四二—三〇

21 征蕃紀勳

本書ハ依田學海ガ水野氏ノ日記ヲ一讀後諸書ヲ參照シ征蕃事件ヲ漢文ヲ以テ略述セルモノ譚海卷之四ニ收メラル

寫 一冊 ○七四一—五〇

22 支那一件ニ付他邦往復竝管下達及雜書

寫 一冊 ○七四一—八九

23 明治七年臺灣蕃地御處分ノ際備夫卒死亡調

征蕃事件發生以來長崎縣ニ於テ取扱ヒタル事件關係ノ一切ノ書類ヲ筆録セルモノニシテ本館本ハ長崎縣立圖書館所藏ノ原本ニ就キ影寫セルモノナリ

寫 一冊 ○七四一—八八

太政官達第一九號ニヨリ征蕃役服務備夫ニシテ蕃地或ハ長崎縣下ニ於テ死亡シタル者ヲ各大區戶長ヨリ長崎縣令ニ調査届出タルモノ、寫シ亦長崎縣立圖書館所藏原本ヲ影寫セルモノ

24 蕃女引渡通知に對する清國官憲の回答

征蕃軍凱旋ニ先チ蕃女「オタイ」ヲ東京ヨリ呼ビ戻シ蕃社頭目ニ引渡シ歸社セシメタル旨都督ヨリ清國官憲ニ通知ニ及ビタルニ對スル挨拶狀ニシテ水野家ノ舊藏ニ係ルモノ

一通

25 臺灣紀事

征蕃軍ノ出征ヨリ和議成立ニ至ル顛末ヲ概記シ間々略畫ヲ加ヘ以テ興趣ヲ添ユ明治八年津江左太郎著

刊 二冊 ○七四一—四二

七



26 臺灣軍記

田代幹夫著明治七年度生蕃問罪ノ師起ルニ及ビ國民一班ノ興趣深キ讀物トシテ書中地圖略畫ヲ挿ミ第一編ヨリ順次刊行ヲ見タルモノ

刊 五編七冊 ○七四一—四一

八

27 臺灣事略

臺灣軍記ニ次テ臺灣事情及征蕃役ノ顛末ヲ記セルモノ上卷ニハ本島西部ノ開創以來二百五十年間ノ歴史ヲ略述シ中、下卷ニハ專ラ征蕃事件ノ始末ヲ録ス明治八年三月東條保ノ著

刊 三冊 ○七四一—一八

28 臺灣戰爭記 卷一、二

本書ハ當時從軍記者トシテ日報社ヨリ派遣サレタル岸田吟香ノ通信ヲ原トシ明治七年伊藤久昭ノ輯録セルモノ水野家ノ舊藏ニ係ル

刊 二冊 ○七四一—一〇一

29 英征臺紀事

米人「ハウス」著一千八百七十五年(明治八年)東京ニ於テ出版セシモノ最初ノ數章ハ七年夏秋ニ互リ「ニユーヨーク・ヘラルド」紙上ニ通信トシテ掲載セラル臺灣問題ニ關シ忌憚ナキ意見ヲ發表シタルモノニシテ當時

刊 一冊 〇七四一—一

既ニ絶版トサレシモノト云フ

30 副島大使適清概略

本書ハ時ノ外務卿副島種臣全權大使トナリ表面修好ヲ目的トシ他面臺灣及朝鮮ノ清國ニ於ケル領屬關係ヲ明ニシ以テ兩地ニ對スル問罪ノ名義ヲ得ンタメ明治六年三月北京ニ赴キノ前後ノ事情ヲ細録セルモノ編者鄭永寧ハ外務少丞トシテ大使ニ隨行セシ人明治六年十一月成稿同二十四年八月刊行征臺事件ニ關シ日清外交ノ發端ヲナセル記録トシテ重要ノ資料ナリ

(明治文化全集本) ○三一—二〇

31 内閣處蕃趣旨書

本書ハ原ト征臺事件ニ關シテノ經過ヲ内外ニ聲明セントスル目的ヲ以テ蕃地事務局ニ於テ編セラレシモ後事情アリテ内閣ノ祕庫ニ納メラレ終ニ世ニ出デザリシモノ本館本ハ當時蕃地事務局殘務掛大藏權少書記官河鱈齊ガ記録局長大藏大書記官遠藤謹助ニ請受シモノナルコト同氏自筆ノ書入ニ記セリ

刊 一冊 ○七四一—六四

32 處蕃提要

寫 十四冊 ○七四一—三六

九



時ノ參議兼大藏卿大隈重信侯ガ征臺事件起ルニ及ビ蕃地事務局長官ヲ仰付ラレタル際關係ヲシテ當時ノ交渉  
文書尺牘等ヲ記錄セシメシモノ侯退官後ハ久シク侯爵邸ニ保存サレシガ後早稲田大學圖書館へ寄贈サレタリ  
本館本ハ同館所藏ノ原本ニツキ直寫セシモノ

33 臺灣始末

寫 八冊 〇七四一—八一

明治七年征臺役ニ關シ前項處蕃提要ガ主トシテ蕃地事務局ニ於テ取扱ヒタル公文書牘等ヲ收録セルニ對シ本  
書ハ更ニ廣ク外國諸新聞其他ノ記事等ヲモ摘録セルヲ以テ本事件ニ關シ内外ノ情勢ヲ併セ見ルベキ好資料ナ  
ルガ完本ニアラザルハ遺憾ナリ本館本ハ沖繩縣立圖書館所藏本ニツキ影寫セルモノ

34 大久保利通日記

刊 二冊 四一六一—四九

大久保公ノ日記ガ明治初年ノ史料トシテ極メテ重要ナルハ言ヲ俟タザル處ナルガ殊ニ征臺役ニ就イテハ公ハ  
全權辦理大臣ノ要職ニ在リソノ滯清三箇月餘ノ日記ハ當時ノ情況ヲ眼前ニ彷彿セシムルモノアリ昭和二年公  
ノ五十年忌追悼記念トシテ日本史籍協會ヨリ編次上梓シタルモノ

35 大久保利通文書

刊 十冊 四一六一—七〇

嘉永四年六月ニ初マリ明治十一年五月ニ終ル前後二十九年ニ互リ公ノ書翰建白意見書、覺書等ヲ收メ最後ニ

36 使清辨理始末

(明治文化全集本) 〇三一—二〇

「使清辨理始末」及「處蕃趣旨書」ノ二編ヲ加ヘ以テ利通文書ノ完璧ヲ期セリ昭和四年日本史籍協會刊行

征臺事件ニ關シ日清兩國間ニ於ケル外交談判ノ大詰ヲナス特派全權辦理大臣大久保利通卿ト清國政府トノ交  
渉始末ヲ當時ノ對話筆記或ハ往復書翰等ノ公文書ニヨリ金井之恭ノ編セルモノ當時太政大臣ノ指令ニ「頒布  
ノ外猥リニ漏世無之様厚注意可致事」トアリ久シク官省内外ノ秘密文書トシテ取扱ハレ隨テ今日ニ於テハ容易  
ニ得難キ珍籍トナレリ本全集本ノ外大久保利通文書第十二モ收ム

37 日本談判始末

刊 二冊 〇七四一—八二

明治八年四月刊多田直繩ノ編スル處日清兩國談判ニ關シ中外ノ諸新聞ニ掲載サレシ記事ヲ摘録セルモノ

38 蕃地所屬論

刊 二冊 〇七四一—七六

立嘉度譯本多政辰ノ編ニシテ英文「臺灣蕃地ハ支那帝國ノ一部ナリヤ」ヲ譯補セシモノ當時生蕃討伐ニ關シ日  
清間議論ノ焦點タリシ蕃地所屬ニツキ各方面ヨリ例證ヲ擧ゲ最モ日本ニ有利ナル結論ヲ下セリ明治七年島邸  
泰ノ序アリ



39 英 臺灣蕃地ハ支那帝國ノ一部ナリヤ

刊 一冊 0741-11

前記蕃地所屬論ノ原書ニシテ米國領事「リゼンドル」ノ著一千八百七十四年(明治七年)上海ニテ刊行各種ノ臺灣地圖及羅馬字書キ蕃語文書ノ寫真九葉ヲ附載セリ

111

40 英國政府發行報告書

刊 二冊

(一千八百七十五年支那關係第二、四號)

臺灣事件ニ依ル日支兩國ノ紛爭解決ニ關スル往復文書ヲ收録シ議會ニ提出シタルモノ

41 佛 臺灣と日本の出征

刊 一冊 0741-4

「エドモン・ブラウシニ」著佛國雜誌「レビニエ・デ・チユー・モンテ」ノ一部ナリ

42 松菊木戸公傳

刊 二冊 四五九—二九六

維新ノ元勳木戸孝允ノ傳記昭和二年刊本本書下卷ニ「臺灣征伐と公の歸國」及「日清兩國葛藤の顛末」ト題シ當時征韓、征臺ノ論ニ國ヲ擧ゲテ騒然タル狀況ト其ノ間ニ處セル公ノ動情ヲ詳記セリ亦征臺役ノ顛末ヲ知ルベキ好資料タリ

43 西南記傳

刊 六冊 四一六一—一六

本書上卷ニ「征番の役」一篇ヲ載ス約二百七十頁ニ涉リ主トシテ征臺事件ノ外交方面ノ記事ヲ詳記セリ

44 籌辦夷務始末

刊 百三十冊 四二五—一七

本書ハ清國大學士文慶等ガ勅命ニ依リ纂修スル處ニシテ道光十六年ヨリ同治十三年ニ至ル外交關係ノ文書ヲ收録ス全二百六十卷民國十九年故宮博物院ノ影印ニ係ル征臺役ニ關シ清國側ノ資料乏シキ時本書ノ記事ハ參考トナルモノ多シ

○

45 大日本琉球藩民五十四名墓碑拓本

〔尾崎秀真氏藏〕

碑ハ高雄州恒春郡車城庄車城ヨリ一里餘ノ田園中ニアリ明治七年西郷都督ノ移葬ニ係リ昭和三年在臺沖繩縣人ノ篤志ニ依リ改修サル

46 牡丹社 遭難民墓碑改修報告書

刊 一冊 〇七四—一七七

昭和二年在臺沖繩縣人有志ノ盡力ニ依リ遂行サレシ遭難民墓碑改修ノ報告書ニシテ從來遭難者五十四名ノ氏

111



名一モ傳フルモノナク終ニ湮滅ニ歸セントセシヲ此ノ改修ヲ機トシ百方探查ノ結果漸ク詳トナリシハ同有志ノ功績トナスベシ附録トシテ有志總代理屋宏氏ノ「牡丹社遭難懷古」ト題スル一篇アリ當時ノ事情ヲ闡明シタル有力ナル資料ナリ

一四

47 臺灣遭害者墓碑拓本

二軸 〇七四一一〇五

碑ハ那霸市波ノ上護國寺境内ニアリ明治七年征臺ノ役ニ際シ蕃地ヨリ送り届ケタル觸體ヲ合祀シ明治三十一年時ノ沖繩縣知事奈良原繁男等ノ盡力ニ依リ建立サレタルモノ

48 西郷都督本營記念碑拓本

〔松倉鐵藏氏藏〕

49 日報社臺灣記事石門口勝戰之圖

六枚一組 〇七八一一七

一蕙齋芳幾畫

50 臺灣島石門進擊之圖

三枚一組 〇七八一一八

永島孟齋畫

51 大日本辦理大臣支那於北京臺灣事件議決之圖

三枚一組 〇七八一一四

大蘇芳年畫

52 明治七年役歸順蕃に賜りし日章旗

一流 〔臺灣總督府博物館藏〕

53 明治七年役兵士使用の飯盒

一個 〔臺灣總督府博物館藏〕

54 日本歴史圖録「第五輯」

四一〇三一六

本圖録中左ノ寫眞ヲ收ム

- 第一圖 西郷侯爵家藏ノ寫眞ニシテ征臺當時記念ノ爲メ撮影サレタルモノ
- 第二圖 同家所藏ノ繪圖ニシテ當時ノ實況ヲ外人ノ手ニ依テ寫サセシモノ
- 第三―八圖 何レモ當時ノ戰利品ノ寫眞ナリ

55 臺灣征蕃日記

服部潛藏氏遺稿 昭和五年六月二十一、二十二日臺南新報所載

一五



56 七年役の回顧「牡丹社討伐の記念」

當時人夫五百人長トシテ従軍セシ大倉喜八郎男ノ回顧録ナリ「大正五年四月二十五日臺灣日日新報所載」

57 瑯 嶠

刊 一冊 ○七四九—一

本書ハ上下二卷ニ分チ上卷ハ著者ガ大正九年二月阿猴（今ノ屏東）ヲ起點トシテ本島最南端鴛鑿鼻ヲ究メン折ノ記行文ニシテ下卷ハ專ラ瑯嶠ヲ中心トシテノ史譚特ニ明治七年役ノ原因結果ヲ詳述セリ大正十一年刊

58 高雄州寫真帖

一冊 ○七四八—四二

本帖中ニ征臺軍本營地龜山、激戰地石門及琉球藩民五十四名墓ノ鮮明ナル寫真ヲ收ム

昭和七年一月十五日印刷

印刷代贈寫

臺灣總督府圖書館







行でえん。嘉永十一年の事。こやつに象山の真印二顆を  
有してゐるそうか、鷹の代と浮山に出すよゝうの特  
に真印を捺すもさうか、頗る欺くえ易いとの  
二顆の印ハ平啓印と云ふと云ふ白字の印と「象  
山氏」の朱字の印があるさうか、自分いいつた鷹  
真渡の朱字の印に「国」の字本仲(国)と捺して  
比が、あつても中村の「母々胡麻さん其化と真筆  
と鑑定してゐると云ふ

母渡世の妻結の真に多あすも回り蓋ぬるよめて  
ある自分か北條の遠西村徳大印を頼きんて頼  
山陽の田村三十七郎の印考をいひ、碓氷一昨  
年の事といふ。母が、も西村の親族が来りて



このをいひ、西村の事あるは秋木素の親族の  
為め約年の裏書をいひ、佐伯二条の代から  
西村の公接と云ふ、彦彦の山陽邊(佐)を平  
と改め、いふと云ふ、さういふとき、西村の元  
来の事業をいふ手を出す人柄は、いひ、親族  
のなか飛人比尖難といふ、さういふ、いひ、















『新報』二月號を見て一息を成しこころ切り振  
とぬぬぬ  
一月三日記

平山晋吉の此河原つ下は東京府のき心者  
いふ文、歌名は役生のことと一此の誤りか  
相、素とぬぬと上流しぬぬも東京府の  
の形心うたぐ記、此男竹世と稱さん  
ぬぬもと坊主しやモヤの主人があるん  
楽心者、今銀世女房の別  
鳥居と云世末とぬぬぬぬ

「桐一葉」の初演

平山 晋吉

「桐一葉」の初演

おたづねにより、坪内博士の創作「桐一葉」上演の経緯  
をお話いたします。

明治廿七年の一月には日露の國交斷絶が焦眉の急となつたので、世間が騒がしく、物見遊山どころでなく、一般に不況となりました。でも興行はせぬわけにはゆかずどんな演劇をしたら當るだらうかと腐心し、史劇物か、時代物か、世話物かと穿鑿した結果、坪内博士の作でまだ一度も上演されなかつた「桐一葉」を選び出しました。文學博士作の演劇は今迄に例がない、それだけでも觀衆に歡迎されるだらうと思ひました。

中村芝翫、今の歌右衛門は築地河岸に住つてをり、その頃東京座の座頭であり、資本主でありましたので、私は早速丈を訪問したが、早速に會つてくれたので、「二月興行に就いて何か名案がありますか」と聞くと「まだ何もない」

といはれたので、「それならば二月興行に坪内博士の「桐一葉」を上演したらいかゞでせう、屹度世間の人氣を喰ふことは受合ひます」と巨細に説きましたところ、丈は直に興行主を電話で呼びよせ、それから三鼎になつて談合しました。興行主は「も二もなく賛成し、私は持参した「桐一葉」を内讀しました。すると歌右衛門丈は、大熱心で聴き終り「結構ではあるが、わたしに演じえられようか知ら」と躊躇の色で、更に夜半まで種々研究を重ねた結果、おひく自信が出来たと見えて「演ります。演つて見せます」と斷言し「いゝ物が捉つた」と欣喜の體であつた。博士が「桐一葉」をお書き下しの當時は、片桐且元を九代目市川團十郎、淀君を五代目尾上菊五郎、石川伊豆守を先代市川左團次、木村長門守を、故人市川新藏等々といふお心組であつたさうです。さうした名人を豫想しての作なのである以







花見の場 二月七日と見えて一息を吐いて二三日の切り後

演初「葉一桐」

がよく、場面が際立つて見映えがする。そこで芝翫丈からくれぐれも花見の場の繰り上げを依頼されてをつたのである。それとお虎の自害場、長良堤の場に義太夫を書き入れることを話されてゐた、これは座付に義太夫語り、三味線弾がゐる。この人らを休業させても給料を支拂ふ義務がゐる。本人達も給料を貰ひ徳をしたといつて甘んじてをもられない。かうした種々の事情があるので、私は神経を悩ました。去りとして黙してもをられずいひ出して許可取消の運命に落ちいつては、折角盡した苦心も水の泡モジ／＼してゐる中に時は過ぎる思案につきてしまつた絶體絶命、恐る怖る始終をお話し上げると、それもこれも實演用に書き上げての上の事との仰せであつた。で胸を撫下したものの、責任は一倍重くなつた。市島先生はお歸りになり、博士のお座敷で一緒に御飯をいたゞいた。その膳には羽盛鶏、他に珍味が乗つてあつた。やがて私は自分の室に引き下つた。東京座の興行主には三日間で歸京するといふ約束、ところが「桐一葉」は返しもで八幕、それを短時に實演用に書き上げるのは決して容易な仕事ではない。天窓がガングンしてたまらなくなつて来た。

けれど「桐一葉」は其内讀みを數回してをつたので、地の文章を活用したので、博士も御満足で「これならよし、これならよし」といふお言葉であつた。完全に「桐一葉」の許可を得たのは二月七日、午前十時半頃であつたらう。私は重荷を下した。大いに心を安んじた、是は全く専心精進した賜である。手の舞足の踏みどころもわからぬほど喜悅した。博士は私が持参して行つた「桐一葉」の單行本に畜生塚から淀君寝所夢覺の場に變はる個所に特に朱筆をお加へ下された。右の單行本は「桐一葉」初演の紀念として保存してゐたが、大震災に焼失してしまつた。「桐一葉」が貸與される迄に御盡力下されたのは、市島先生の御好意と奥様の御配慮とが心魂に徹してをる。かうして一段落となると、奥様が梅園に行くことをお誘ひ下された。が、前夜東京の電話で歸京を急かされてをつたので御辭退した。熱海に三日のたが一浴もせずにお暇したわけであつた。其後、市島先生には、今川小路の風月堂が西洋料理開店の際、久方振りて拜顔した。その時「桐一葉」のお話があつた。東京座で「桐一葉」上演許可をされたいといつて東京座の作者が来たところ、坪内が拒絶したので困つてゐた。それを僕が口添へして上演させてやつたことがある、と仰せられた。その作者といふのは私でございますと申し

案内すらく運んだ。私は鳥屋の仕切書といはれた大の悪筆であるので、先生にお讀みにくくないやうにと丁寧な書けば時間が費える、急げば鳥屋の仕切書になる。いやどうも大苦心。博士の序幕御檢閲が済まぬ中に、二幕目、三幕目と書き上げ、お座敷に持つて行き、あと／＼とお目通しを願つた。私が室に引き下つた時、時計は午前二時を打つてゐた。かねて頼んであつた鍼醫の治療をうけてトロ／＼すると、午前六時、博士から後幕をといふ御請求。洗面してゐるとまもなく、四幕目お虎の自害場を書き上げ、義太夫を加へて仕上げる。五幕目寝所の場の前に、花見の場、畜生塚の場を加味する工夫には心氣衰亡、腕も指も萎え縮む。筆は動かなくなる。が、忍耐して六幕目を脚色して博士の閲讀を願つてゐたところへ東京の電話が来た。「桐一葉」のお許しが叶はなければ明朝にも歸京しろといふ興行主の鞭撻。私は「桐一葉」は許可された、今書き上げ中である、仕上り次第閱を乞ひ、歸京するといつてやつた。もう初日が極つたといふ電話なので緩々してはをられない、大馬力にて遅くも明晩歸京すると返事をした。その夜は徹夜で長柄堤の場を淨書して翌朝博士のお座敷へ伺つて閱を乞うた。この長柄堤の義太夫の文句は主として「桐一葉」

上げたら、ハテ妙なところで又逢ひましたねと、更にいろいろおはなしをうけたまはつた。初度に奥様のお誘ひをお断りしたのが祟つた歟、その後熱海へは數回行つたが、曾て梅薫る時季に行き合はさない。私は梅園に杖を曳かずじまひに終るでもあらうか。

話が前に戻ります。さて私は歸路の人車を急いだ。が折よく零時十分かのに乗れた。と商人風が數人憂はしげにしてゐた。その中で老人が一人銘酌してをつて自慢氣に腕を叩き、「おれは若い時分には講談席をよく聴いて歩いたものだ。三國誌や、太閤記やは語で覚えてゐる。それだから軍は好きだ。行軍の都度おれは觀に行く。何だ、露兵の五人や十人向つて来たからつて鐵砲の臺尻で擲り殺すのはワケナシ」などと威勢よくいつてはゐたが涙をぼろ／＼落してゐた。息子が微發されたのかも知れない。

恰も此際日露開戦の詔勅が下つたのである。博士のお宿を取急いでお暇したことを僥倖であつたと思つた。日露戦に就いて動員令の下つたことをお聞きになつたら或ひは貸與を取消されたかも知れないからである。それとも私が歸京しない先きに上演許可取消の電話が興行主の元へ通じてをりはせまいかと大に心痛した。然し一度博士がよろしい

演初「葉一桐」



新橋驛に著いたのは午後八時頃であつたらう。その足で  
すぐ芝翫丈を訪ねると、前夜打合はせてあつたので興  
行主も見えてゐた。早速伊原先生のところへ「桐一葉」の  
許可になつたことを届けさせた。芝翫丈は許可されたこと  
に萬悦して、私の労力を謝し、いかにも感銘に堪へぬ面持  
であつた。

新橋驛に著いたのは午後八時頃であつたらう。その足で  
すぐ芝翫丈を訪ねると、前夜打合はせてあつたので興  
行主も見えてゐた。早速伊原先生のところへ「桐一葉」の  
許可になつたことを届けさせた。芝翫丈は許可されたこと  
に萬悦して、私の労力を謝し、いかにも感銘に堪へぬ面持  
であつた。

いよ／＼一番目は坪内博士作「桐一葉」と据わつた。さ  
て二番目に種々の狂言を詮索したが、一番目とシツクリ色  
彩の出合ふものが見當らない。關係者はすつかりアグネて  
しまつた。そこで私が人車に乗り合はせた老人のことをは  
なした。みんながそれは際物で至極よいと賛成された。取  
急いで執筆した。俗にいふ一夜作りといふのである。一番  
目、二番目と新作が並んだのはめづらしかつた。その二番  
目の名題を「日本勝利唄」と附けた。

榎本虎彦君が、拙宅へ來られたその咄は「桐一葉」上  
演のことであつた。そこで榎本君が私に「單行本から君が  
を打破し革新しつゝ行くのを希望するのであります。お互  
ひに意氣が投合して演じたら新味は必然現されることはあ  
きらかでありませう、どうぞ皆さんが一身同體大車輪に活  
動して大に美績を上げること誓つていたゞきたいのであり  
ます。世界的學者が御執筆になつた演劇を、同人達で演じ  
えらるゝようなつたのはその位置が向上したと推察されま  
す。一概に役者といはれ世間で輕蔑されたものが、今は藝  
術家とたふとまれるように成つたのでありますから、昔の  
人のような役者根性を失くして相互に睦み合ひましたなら  
期せずして成功にうたがひはありません。

今や滿洲の野に出征してゐる、我國の軍人は、露國の兵  
卒と、奮戦、苦闘、百戦、百勝、戦勝を重ねつゝをる、誠  
に盡忠、愛國が腦髓に染み込んでゐる、大和魂のすぐれた  
誇りであります。演劇の舞臺は、則ち戦地であつて、我々  
は軍人であるのである。されば勇氣を鼓舞して、奮勵努力  
倒れて止むの言葉を守り懸念に自己の本分を盡していたゞ  
きたいのであります。とこの詞に伴優は勵まされ大に活  
氣を生し座員一同は決起して怠慢の者は一人もをらなかつ  
た。

作者部屋で、書抜きや、大道具附帳や、小道具附帳や、

脚色したに違ひないのだネ」と念をおされた。「いふ迄のこ  
とはない」といつたら「桐一葉に對して君は特入主である  
ことはごぞんじあらう。博士は原作者であるから先入主は  
いふまでのことはない、然し桐一葉を脚本した君に権利が  
なくてはならない。といふのは今迄桐一葉を誰も穿鑿アナ  
グラなかつた、その單行本に著目披露上演した勤功、思念  
力は容易の刻苦ではない全く疲勞に贏ち得たといつても過  
言ではあるまい。ダガ同業者として一言いつて置きたいの  
は學者のものを脚色した場合、此方にも権利があることを  
承知してゐて、もらはなければ困ると拗られたことがあつ  
た。その後牧の方、孤城落月を私は淨書して上演したが、  
榎本君の注意は當然であるが、博士の作物を淨書上演する  
のを譽れとするので一言もかうしたことは申し上げなかつ  
た。「全く桐一葉を上演させたのは劇界に貢獻した君の賜  
物である、僕は牡丹餅判を捺印して保證する」と煽てられる  
のか、譏られるのか、愚弄されるのか甚だ厭な感じをさせ  
られた。

桐一葉の稽古初めに、歌右衛門丈は幕内に座員一同を集  
めて懇話された。「今回坪内博士の桐一葉が上演することに  
取極めた。それについて在來の演劇の典型を固守せず障壁  
衣裳附帳やを認めて、その係り(奥役)に渡す。座頭の指揮  
をうけて俳優諸氏は衣裳を取極められる、はた座頭、立作  
者の指圖に依つて、大道具、小道具を拵らへたのである。  
またその時分には舞臺監督はをらなかつたので大體は立作  
者が取扱うことになつてゐた。夫ゆゑ桐一葉には、舞臺裝  
置、衣裳考證の責任をもつた先生はをらなかつた。  
帝國劇場が開場されて、鳥居清忠先生が、總て舞臺のこ  
とに師事されたので、その時代を描寫するようになった。  
尤もその以前劇場で畫家の先生方を舞臺のことに就て御依  
頼したこともあつたが、それは一時の間に合にすぎなかつ  
た。

稽古は弛まず日々進行してゆつた、看板下畫、番附下繪  
は畫工に届ける、興行主と、私と、奥役と、附人とが別番附  
の下繪を見て相談してゐたところへ仁左衛門丈が入つ  
て見えた。別番附の下繪を眺て居たが、面が蒼白になつた  
お冠りを曲げて歸つてしまつた。それには憤激する理由が  
あつた、直と出勤を拒絶して來た、大動亂が突發したので  
演劇は破滅の境遇に出會はせぬかと憂慮したが、別番附  
を書き改め七重の膝を八重にして懇請したのでよう／＼納  
まつて仁左衛門丈は出勤することになつたが、そのケリの



つくまでに一方ならぬ心配をさせられた。この別番附が去年歌舞伎座で桐一葉を上演した際、雑誌歌舞伎の表紙になつて現はれた、これにもワヤク、イタヅラのあることは一目瞭然である。附人と、奥役の悪意で私は困惑させられたことを偲び、感慨無量であつた。

坪内博士は、熱海よりお歸京になり、演劇の稽古場へ御臨席になつた、これは茶屋魚十の二階で御同伴は東儀鐵笛、土肥春曙、水口薇陽の三君と、他に兩三名であつた。博士は俳優個人々々を別席にお招きになり、桐一葉の役々とその性格を巨細に御説明になつたのち、單行本を御朗讀なされた、誰も、彼も抑揚の鮮明に敬服して咳一つするものもなかつた、常に教壇にあつて講義の洗練は顯著である。

博士は終始稽古場にお立ち合ひになり、科白の御指導なされた、その庇護で新様式に進み進み伸び展ひでゆくのが歴然としてゐた。これには歌右衛門丈の訓示も大も功を奏した……俳優諸氏は火の出るような稽古に練習が積み自信力を持つて来た、二月廿七日開場になつた、博士の桐一葉が上演されたといふので、大戦争にもめげず、劇場は雑沓した観客は熱狂興奮して空前未有の盛況を見た。

この演劇に歌右衛門丈の徒君が好評を博した、畜生塚の

わかつては、今にも木の根が毀れて来さうに感じて長良堤の開幕中虚に入つてゐてヒヤ／＼としたとある、翌日本木の根の釘ジメを大道具にたのんだ。その後幾度も釘ジメをしてもらった、度毎にヨナイをセシメラれるには閉口すると鷹二君はいはれてゐた。澤村訥升（改名宗十郎丈）、の銀之丞が渡邊邸で舞踊をする、その唄は私が狂言記の那須與市の件を補筆したのである、桐一葉再刊には博士作の歌詞と變へてあつた。市川女寅（改名門之助丈）、の蜻蛉はうひうひしく評もよかつた。中村芝鶴（改名傳九郎丈）、のお虎には私はもてあました博士が日々ダメを出す同僚のところへ傳言にゆく、尤も活歴の演劇に不向きの人であるから説明するほど同くなつて手足の動きが自由にいかず、それについてセリフがツマツてニツチモサツチモいかなくなる、どうしたら博士のお氣に召しませうかと半べソで泣きを入れられたには返じに窮してしまつた。その後帝國劇場で尾上梅幸丈のお虎を観た、俳優に一文上りといふ諺がある。成程高い人は高い丈に藝の味、餘裕があると感歎させられた。一文上りなんてなんでもない言葉だが噛みしめると味があつた。斯道格言だ。

桐一葉が機に乗じて大入満員の大隆盛であつたことは誰

場が夢覺めの道具に替つて、淀君が寢所の襖に百合の花の畫いてある繪を斜面に眺めて「この黒百合を見るにつけ」といふ長臺詞が巧まず旨くいひ廻したのは流石博士の御教示と觀察させられた。この時から歌右衛門丈は淀君俳優と極めを付けさせた。博士のお逸話に黒百合のせりふを某博士が御熱讀になり大層御褒詞あつたと承はつたことがあ

る。是迄の活歴物と聊か勝手が變るような感じがしたと見えて、仁左衛門丈の且元が、段四郎丈の石川伊豆守に蹴轉がされる息が投合しない、博士の注意を兩優の元へ數回言ひにいつたが兩優が自己の意志を通して直さない、夫ゆゑ閉場迄息がシツクリ合すしまひであつた。仁左衛門丈の且元が、長良堤の臺詞を記憶し難かつたので、竹柴鷹二君に臺詞をツケてくれるよう頼んだ、黒衣を着ても身體が舞臺に出てゐては、博士に對し失禮であると尊重して、且元の腰を懸ける木の根の虚に矮小の鷹二君が入つて臺詞をツケルことにした、七日目ごろであつたか木の根の揺ぎを覺えた、それから兩三日心づがすにをつたが、或る日仁左衛門丈が臺詞をいひはじめるとミチ／＼木の根が動き出したので鷹二君は大に驚かされた。テツキリ同僚が懸命になりすぎて身體を動かすその動揺で木の根が動揺するのであると

も記憶してゐよう。千秋樂の翌日歌右衛門丈初め、座員一同感喜雀躍して當り振舞の大祝宴を開いた。その後博士は、牧の方、孤城落月を引き續き上演させた、名残星月夜、義時最期、お夏狂亂、その他戯曲、新舞踊と種々御執筆なされた。一石が的中して破紋は廣く擴大された、これは千載一遇の機會に到達したのである。

演劇改良の烽火は數十年前に叫ばれた、遂に實現するに至らなかつた。坪内博士の桐一葉によつて、演劇革新の芽が生じた、花を咲かせた、實を結ばせたのである。是は博士の見識と、演劇に研鑽を重ねた勳功であることを大衆に賞揚されてをる。

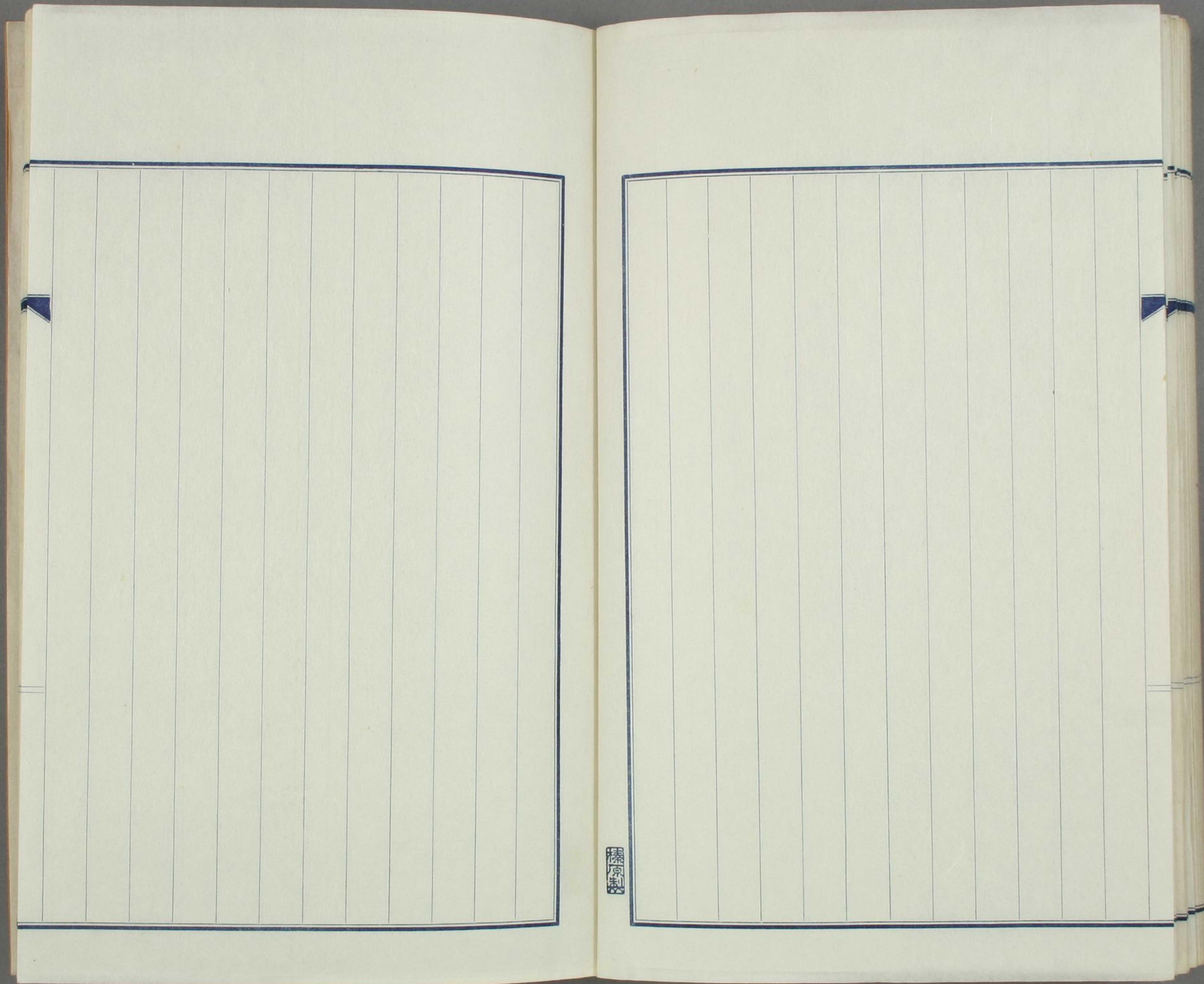
（編輯者附記） 本稿の記事には、平山氏の記憶ちがひと見え、年月其他に多少の錯誤あるよし坪内博士申され、次號の「柿の帯」で正誤かた／＼當時の追憶を書いて下さる筈になつてをります。

一月號正誤表	誤	正
40頁挿繪説明	人形重寶記	人倫重寶記
40頁上頁6行	人形の裏	人形の裳









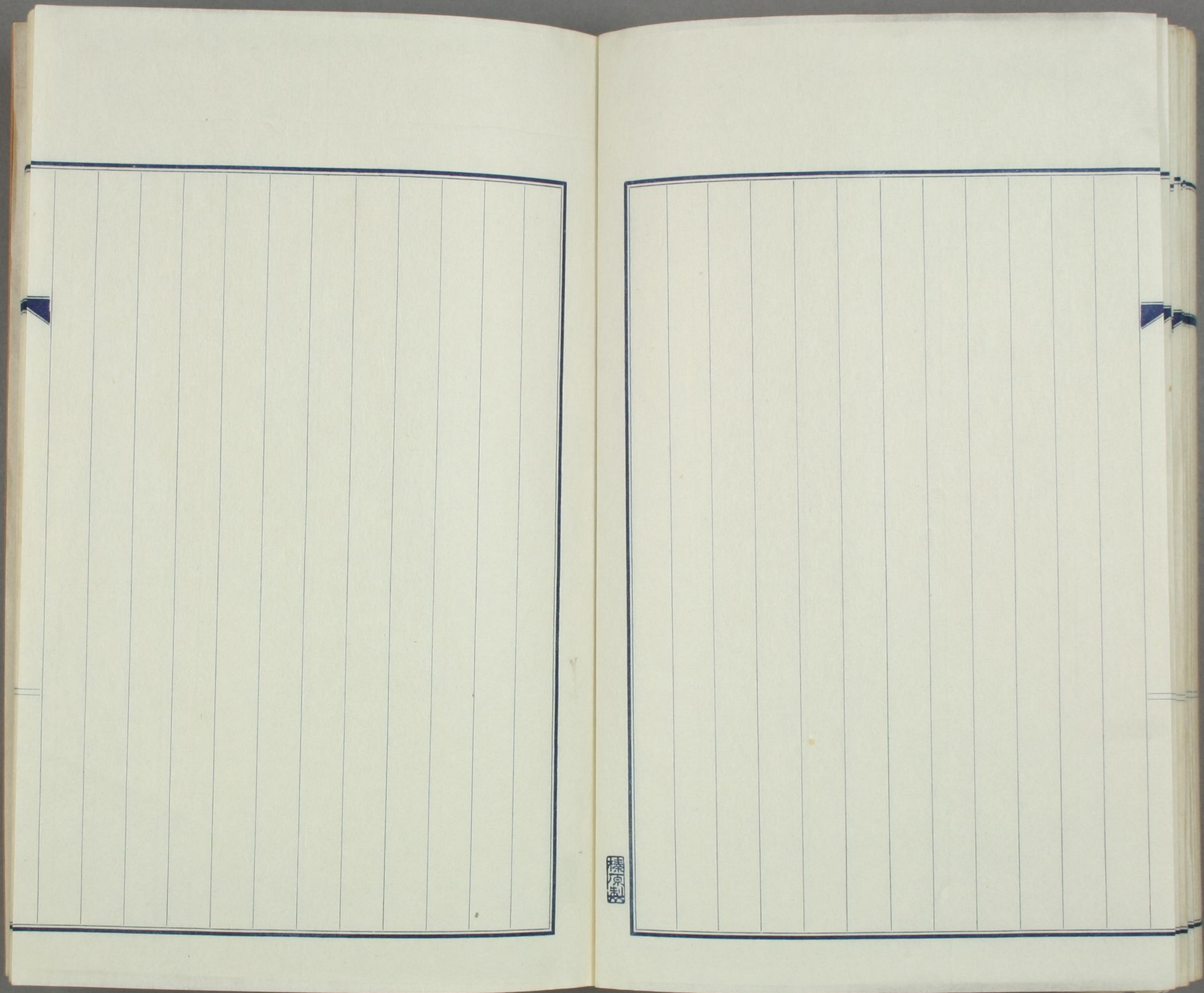
東京製





面分部の鯉圖 (圖五十九第卷下) らか「集品百付染古」





湖南



以下全て  
白紙



